
日本台湾学会 ニュースレター

The Newsletter of the Japan Association for Taiwan Studies

第 28 号

<目次>

巻頭言	…1
特集 2014 年台湾統一地方選挙観察	…3
特集 台湾研究の素	…7
追悼	…21
日本台湾学会活動報告	…23

巻頭言

苦悩する/張我軍/の苦悩

日本台湾学会理事長 山口 守

思い起こせば 17 年前の 1998 年 5 月 30 日、日本台湾学会設立大会で、文学研究の立場から「越境する文学と言語」と題した発表を行い、台湾文学研究には作家・作品・言語を既成の枠に閉じ込めず、その理解や認識の境界線を乗り越えていく必要があることについて話した。単純に国家単位で考えれば、台湾・日本・中国の三つの軸がありそうだが、実際には日本という概念を想定した途端に、その歴史や成立にまつわる既成の思考様式に束縛されて、成立への疑義ばかりでなく、多様性や複雑性も疎かにしてしまい、越境行為が逆に

国家概念強化に繋がりがかねない。もう少し大きくアジア世界を想定しても、いまだ冷戦構造が消えていない朝鮮半島から、南に目を向けてベトナム、フィリピン、タイ、マレーシア、インドネシア、ミャンマー等まで、その多様な社会・文化様態を国家単位で捉えることにも実は無理がある。文学研究で言えば、国家を超える文学の枠組みとして使用されてきた華文文学も、実際には一部で、特に中国では国家意識膨張に陥りがちである。近年、越境よりもむしろ複雑性に注目して、他者間の権力問題、関係性、連動性に目を向けた「華語語系文学 Sinophone Literature」に関心を持つ研究者が出始め、成果が少しずつ表われている。

まだこうした議論を知らない 17 年前当時、私が強く関心を抱いていた越境する作家は四人、張我軍、楊逵、吳濁流、白先勇であった。このうち後三者については、その後ある程度研究を進めることができたが、最初に構想していた張我軍研究は、残念ながらなかなか進展しなかった。理由の一つは、逆に見れば望ましいことで、台湾文学研究を進める過程で、李喬、鄭清文、黃錦樹、リグラヴ・アウ等、次々と魅力ある作家に出会い、比喩的に言えば、台湾文学の豊饒な海へ漕ぎ出して、出港地の記憶が次第に遠ざかったせいかもしれない。個人的には、それはそれで必然的な研究の道筋だったと思う。今では、リグラヴ・アウ抜きでは現在の自分の台湾文学研究が成り立たないと思えるほど、強くその作品に惹かれる。

もう一つの理由は、張我軍研究の方法論や論述の枠組み設定にまわりつき、民族や国家やイデオロギーの複雑さに対応しきれていないせいかもしれない。個人的には未解決問題として、1920年代に中国文学との合流を目指し、魯迅と面会して植民地出身者が負わされている重荷を訴えた張我軍の姿、言わば「苦悩する張我軍」と、日中戦争期に日本によって創設された所謂「偽北大」（本物の北京大学は南遷して臨時に西南連合大学となった）で日本語を教え、1942年第一回大東亜文学者大会に中華民国代表として参加する張我軍の姿、言わば「張我軍の苦悩」がうまく接合できないことが最大の課題である。私の張我軍理解は今から9年前に書いた「帝国日本が台湾に持ち込んだ日本語は、植民地出身者に生涯消えることのないスティグマを押ししたも同然である」（『植民地・占領地の日本語文学』『『帝国』日本の学知』第五巻、岩波書店）との段階に留まっている。これは自分の中では、植民地近代や越境視点だけでは論じきれない問題である。

実は近年見た台湾映画『セデック・バレ』と『KANO』をどう関連させて考えるかという難問に対応する時も、似たような困惑に陥る。個別作品であることが分かっている、同一人物が監督または製作に関わった二つの映画の間にもどのような関係があるかをつい考えてしまうが、自分なりの答えを探すのは容易ではない。二つの映画の物語の語り方に流れる通奏低音のような共通性があるのだとすれば、恐らくそれは歴史の中を生きる人間の可能性と限界性、及び主体性構築に関係する気がするという程度に留まる。帝国と植民地の歴史を想定すれば、強制する側と強制される側があることを思考の出発点として、次にどのような強制と服従・抵抗があったかを考証することになるだろう。その場合、文学で言えば、言語の問題が大きい。そもそも台湾の文学歴史性を考えれば、原住民族言語、漢語、日本語だけをとり、内部の多様性と相互の複雑な関係があることは言うまでもないが、それ自体がどのような経緯で成立してきたかという過程の検証が不可欠である。従って、日本による植民地統治期に日本語で創作する作家が登場することを、単純に同化というだけ

で済まないのは当然である。

これについてはすでに多くの研究蓄積があるので、ここで改めて説明する必要はないが、実は先に述べた張我軍研究で私が直面している問題がこのことに関係している。たとえば文学翻訳上よく議論される概念として、同化 domestication と異化 foreignization があるが、帝国と植民地の言説構造で言えば、更に主体と客体の問題が存在する。言うまでもないことながら、同化一つをとっても、同化する帝国と同化される植民地で問題は異なる。しかも同化を強制することで、帝国が他者としての植民地を異化してしまう局面や、同化対象である植民地側は帝国を他者として理解しない限り同化に服従できない異化メカニズムも存在するだろう。その場合の核心的問題として主体性があるように思う。たとえば、1942年第一回大東亜文学者大会で、張文環や龍瑛宗が日本国内の台湾代表として参加する中、銭稻孫や草野心平と共に中華民国からの大会議員として参加した張我軍が、発言の際、中国語で喋った後、自ら日本語でそれを翻訳して再発言する時の主体性とは何かを読み解かない限り、私の張我軍研究は前へ進まない。文学研究でそこまで過去にこだわる理由は、歴史を顧みる過去としてだけでなく、現在に繋がる時系列と考えれば、その時間が未来へも繋がって行くと思えるからである。その視点から言えば、私の台湾文学研究は永遠に未完である。

最後になるが、私の理事長任期はこの5月で終わる。二期4年の間、当初の構想がどこまで実現できたか内心忸怩たるものがあるが、学会運営に改善があったとすれば、それは協力、尽力してくれた多くの人のおかげである。お世話になった方があまりに多いので、ここで一人一人お名前を挙げることはできないが、この場を借りて厚くお礼を申し上げたい。

特集

2014 年台湾統一地方選挙観察

2014 年台湾「九合一」統一地方選挙雑感 —台中市長選を中心に—

家永真幸（東京医科歯科大学）

昨年 11 月に投開票が行われた台湾地方統一選挙、いわゆる「九合一」選挙は、国民党の大敗に終わった。筆者は今回の選挙について、選挙戦序盤の9月初旬に台北市、新北市および台中市を回ったほかは、残念ながら実地での観察を行っていない。それ以降の情勢については、主にインターネット上の情報に触れていただけである。そのため、会員諸氏にとって新味ある情報をお届けできるか甚だ心許ないが、以下筆者なりの所感を報告する次第である。

まずは台中市で感じたことを記したい。台中市長選挙の結果は、民進黨の林佳龍候補が得票率で 15%近い差をつけ、現職の国民党胡志強市長を破り当選を果たした。胡志強候補は市長在任中に台中市の高い経済成長率を維持した実績があり、今回の選挙戦においても交通網整備を中心とする明確な将来構想を掲げていた。その計画の一端はすでに着手されており、市中心部では BRT なる新交通機関が部分的に運行を開始していた。

BRT とは Bus Rapid Transit の略称で、既存の道路のうち 1 車線をバス専用にすることで公共の大量高速移動手段とするシステムのことである。導入費用が低く抑えられることから、自治体が地下鉄の代わりに導入するケースがあり、日本でも名古屋市などに見られる。筆者が台中市のものを見た限り、まだ一部区間しか開通していないせいか、さほど便利そうには思えなかったが、さりとして従来の交通に混乱を来たしている様子もなかった。

BRT が本領を発揮するのは、区域全体の信号灯の切替を BRT に合わせて統御するシステムを導入してからであり、利便性に対する市民の評価もそこでようやく高まるものと推測される。それにも関わらず、胡志強候補は選挙前の在任中にその一部の運用を開始し、市民の眼前に晒した。これは、同候補が自身の発展ビジョンに確固たる自信を持っていたことの表れだったようにも思える。

ところが、胡志強候補は敗れた。敗因としては、健康不安説や、在任期間の長さが市民から敬遠されたという指摘がある。たしかに、選挙戦のさなか胡志強候補は氷水をかぶるパフォーマンス（筋萎縮性側索硬化症への寄付を呼びかける社会運動で、当時ちょうど世界的に流行していた）を披露するなど、今から思えば焦りと取れる動きも見られた。しかし、胡志強候補には台北市長選の連勝文候補のようなネットが炎上するほどの失策もなく、堂々と政策を訴えた末に落選した観がある。

対する民進黨の林佳龍候補は、若々しく颯爽として、エネルギー溢る人物であった。10 年間にわたり台中市に腰を据えて政治活動に取り組んできた同候補は、著作の出版などでメディアへのアピールも怠らない一方、小さな街の商店主などの間でも着実に支援者を獲得していたようである。今回の選挙戦でも、いわゆる溝板選挙で丁寧に地域を回っていた。

もちろん、林佳龍候補の魅力が胡志強候補を上回ったからこそ、今回の選挙結果となったのであろう。しかし、台北市長選の結果と併せてみると、今回の地方統一選挙では台湾各地で現状に対する閉塞感がきわまり、それを打開する何か新しいことをしてくれそうな人物に期待が集まったという側面もあったのではないかと考えたくもなる。

台北市長選では、国民党の連勝文候補に対し、藍緑対立の超越を訴える無党籍の柯文哲候補が 15%を超える差をつけ圧勝した。いわゆる「柯文哲現象」の余熱はまだ続いており、新市長の一挙手一投足が今も連日メディアを賑わせているようだ。

9月の段階では、少なくとも筆者の目には国民党陣営は悠然と構えているように見えた。慢心している雰囲気では全くなかったが、ノウハウに従

ってしっかりやっていたら最後は勝てるという見通しがあったのではないと思われる。これに対し柯文哲陣営は、20代の若者たちが手弁当で一生懸命支えている、雰囲気の良い学園祭実行委員会のような印象を受けた。

昨年3月の「ひまわり学生運動」に共鳴した若者たちも、多くが同候補の支援に回ったようである。社会を変えたいとの思いで街頭に繰り出した人々が、代弁者を得て、その熱量を政治制度上も反映させることのできた高揚感は、想像するに余りある。同じ年に起こった香港「雨傘革命」後の膠着状況を思い浮かべると、それはいつそう際立って感じられる。台湾人は幸せだなどとは口が裂けても言えないが、一抹のうらやましさを覚えたのは筆者の偽らざる気持ちである。

さて、今回の選挙で示された、台湾における「現状を変えたい」という意思は、この後どのような政治・社会変動をもたらすのだろうか。そもそも今回国民党を大敗させた民意は、「打破したい現状」についてどの程度認識を共有しているのだろうか。それを分析するのは研究者を自称する筆者の責任なのかもしれないが、本稿は「雑感」ということでお目こぼし願いたい。2016年に総統選を控える国民党、民進党の両党が、これからどのような問題を政治争点として取り立てるかを通じて、筆者も学ばせてもらいたいと考えている。

地方私大教員の観察

楊子震 (南台科技大学)

筆者は2013年の夏に日本から帰国し、現任校に勤務を始めた。昨年の台湾統一地方選挙期間には丁度学内の仕事に追われている最中だった。選挙の展開に関心を持っていたが、とても「選挙観察」の余裕を持つことはできなかった。しかし、筆者は社会科学系の教養科目をいくつか担当しているため、講義中多かれ少なかれ教員として履修者たちと今回の地方選挙について学問的な議論をしたことがある。本稿はあくまで個人の見聞に基

づき、所感を述べさせるものである。

筆者の在住地域では、市長選においては民進党候補者の勝利が早い段階から確実視されたため、さほど盛り上がりなかった。そのせいか、市議員の選挙戦もおおむね低調だった。しかしそれは、どの政党の市議員候補者も魅力的とは言えなかったことも一因であろう。後知恵になってしまうかもしれないが、直後の市議会議長選挙の起訴沙汰（「李全教案」）が示すように、台湾の地方政治においてはなお「理念」「党派」より「金銭」「利益」のほうが物事を決めていると言えよう。

周知のように、近年、台湾の市民運動は盛んに発展してきた。筆者の帰国1年前の「反媒体独占運動」を皮切りとして、帰国直後の「白衫軍運動（「洪仲丘事件」）」を経て、統一地方選挙の前に「ヒマワリ学生運動」が起きた。その担い手は、少数の研究者や既存の市民運動家のほか、従来政治に比較的に関心を示していなかった一般市民及び大学生が重要な役割を果たしていた。その理由は台湾社会、特に若者の間に満ちている閉塞感と関連があると言わざるを得ないだろう。

筆者の勤務校は、私立の所謂「実学重視」の地方大学である。学生は全員優秀とは言えないものの、素朴な若者が多い。学内は従来総じて、政治に無関心な雰囲気である。他方、筆者は「導師」（クラス担任）も担当しているため、職務上の関係で現役生の経済状況及び卒業生の進路をある程度把握しなければならない。着任してから、多くの学生に将来厳しい現実が待っている上、在学中もアルバイトや教育ローンに追われていることを目にしている。進学に向いていないのに、家族の期待に押され、いやいやながら大学に通い続ける学生もいれば、卒業の条件を満たすために疑問を感じながら資格の取得に没頭している学生も少なくない。本校のみならず、恐らく全国の大学生も似た状況に置かれていると思う。

個人的な考えにすぎないが、こういう閉塞感は先述した市民活動の勢いを増幅するのみに止まらず、統一地方選挙の結果にも繋がったと考えられる。「ヒマワリ学生運動」期間、本学でも現総統関連のモニュメントに政府批判のビラが貼られ、古株の教員を驚かせた。ビラでは、人気韓国ドラマ

『星から来たあなた』にちなんで現総統と中国の関係が揶揄され、「独裁が事実になれば、革命は義務となる」という文言が並び、学生の立法院占拠に同調している。また一時、学生の「課題作品」としてキャンパスに黒く塗られた段ボールが置かれていることもあった。現に投票のため帰省した学生も相当いた。

筆者は講義中、現在進行中の政治情勢を論評すべきではないと思い、学生運動及び選挙の話題に関しては極力触れないようにしてきた。しかし、担当科目の性質もあり時に質問されていた。その際、適宜に歴史の事例や研究者の主張を紹介したと共に、逆に質問を投げ返した。それで普段、人文社会科学を無用の学と考えている学生に少しでも思想の刺激を与えればと思った。

いずれにせよ、今回の統一地方選挙は結果的に民進党の勝利に終わった。しかし、若者たちの閉塞感をどのように打開するのか、きたる総統選の候補者にとっては答えなければならない難問であろう。

台湾統一地方選挙と中台関係

福田 円 (法政大学)

本稿では、先の台湾統一地方選挙について、中台関係との相互作用という視点から事実関係をまとめ、中国側が今回の選挙をどのように捉えていたのか、選挙結果は今後の中台関係にどのような影響を与え得るのかについて考察する。なお、統一地方選挙戦の経過と選挙結果については、前号(27号)に小笠原欣幸会員による詳細な分析が掲載されている(「台湾統一地方選挙観察」)ので、そちらを参照されたい。

今回の統一地方選挙では、選挙前から注目を集めていた台北市や台中市のみならず、桃園市、新竹市など優勢が伝えられていた地域においても国民党籍の候補者が落選した。また、高雄市や台南市で民進党の現職候補が高得票で再選を果たしたのに対し、新北市などでは両党候補者の得票差が

開かなかったことも印象的であった。選挙後に概観すれば、県市長選挙では22の県市のうち民進党が13(6)、国民党が6(15)、無党派が3(1)を獲得し(括弧内は前回選挙)、民進党が大幅な躍進を遂げた。県市議会選挙においても、民進党の得票率(37.08%)は国民党の得票率(36.86%)を初めて上回った。

日本では、このような選挙結果は台湾における対中嫌悪感の高まりに起因すると強調される傾向が強いように思える。しかし、いわゆる「中国要因」が選挙結果にどの程度影響したのかという問題は、注意深く観察すべきであろう。選挙結果は馬英九政権の執政全般に対する台湾民意の不信感が現れたものであり、対中政策はそのなかの一部と位置付けるべきであると筆者は考えている。とはいえ、今回の選挙を2016年総統選挙の前哨戦と位置付け、中国側がその経緯と結果を注視していたこともまた事実であろう。

2012年に第2期馬英九政権がはじまった時点で、台湾と中国との交流は既に「踊り場」に達しており、さらなる成果は出にくい状況にあった。それでも、2014年のはじめには、中台交流の窓口機関である行政院大陸委員会と國務院台湾事務弁公室のトップ会談が実現し、馬英九氏と習近平氏が会談する可能性も取り沙汰された。しかし、3月下旬に台湾で「ひまわり運動」が起きると、こうした中台関係制度化や政治的交渉の試みは減速せざるを得なくなった。さらに、香港において「雨傘革命」が起きると、馬英九政権は香港の「民主」を支持する立場を表明した。このような状況下で、習近平政権は中台首脳会談の実現を見送りつづけ、9月末には台湾にも将来「一国家二制度」を適用するという方針を明示的に確認するに至った。さらに、11月中旬に中国が韓国との自由貿易協定(FTA)締結に合意したことが報じられると、台湾ではそれによる経済的損失を憂慮する声が高まった。

このように、習近平政権は統一地方選挙前であったにもかかわらず、馬英九政権を利するとは言えないような言動を採ることがあった。その前提として、今回の選挙で与党国民党が敗北を喫することを、中国側がある程度想定していたことを指

摘できよう。そうであるとして、総統選挙戦が本格化する前に台湾側に不人気な政策や立場の表明を行ったとするならば、それは合理的な判断であったとも言える。中国の台湾問題専門家たちは、対中政策に関する台湾の民意が問われるのはあくまでも 2016 年の総統選挙であって、今回の地方選挙ではないという議論を選挙前から展開していた。さらには、今回の選挙で国民党が敗北した場合でも、それを反省材料に約 1 年後の総統選挙で国民党が勝利するのであれば、中国にとってはむしろ望ましいとの見解も見られた。

選挙における国民党敗北の程度は、中国における大部分の専門家の予想を遥かに超えていたようである。ただし、国民党が大敗を喫した要因は、馬英九政権の執政能力不足や選挙戦略の誤りに求められた。これに対し、民進党が総統選挙に向けて大きく躍進したことは、中国の専門家も認めざるを得ない。選挙後、中国においても 2016 年に民進党政権が誕生する可能性が論じられるようになったが、民進党が総統選挙に臨む際には対中政策の調整が目下の課題であるとの指摘がなされている。にもかかわらず、今回の選挙結果をうけて、民進党が対中政策を調整することはますます困難になるのではないかという見立てもある。中国の専門家たちによる一連の議論からは、選挙後の台湾政局と民進党の出方を見極めてから、総統選挙に向けたカードを切ろうとする中国側の慎重な姿勢が透けて見える。

このような対台湾政策における慎重な姿勢は、最近の中国政治外交におけるキーワードである「新常态」という概念で正当化されようとしている。「新常态」とは、習近平政権が経済政策の分野で使用しはじめた、ポスト高度経済成長時代にはいり、中低速成長で経済を安定させようという概念である。中台関係においても、これまでのように関係の急速な発展や突破は求めず、漸進的に安定した関係を構築するという意味で使用されはじめたようである。このようなロジックから見て取れるのは、一方では台湾との関係における中国側の自信であり、他方では台湾との関係に現時点でこれ以上の発展を望むことは難しいという、極めて現実的な判断である。

「新常态」という新たな概念を援用しつつ、中国は総統選挙までにどのような対台湾政策を展開するだろうか。馬英九政権および国民党との関係においては、そのタイミングに配慮しつつ、既に着手している中台関係の制度化を可能な限り進展させようとするであろう。同時に、民進党との間でも直接および間接的な方法を駆使して、「92 年コンセンサス」や「一つの中国」をめぐる妥協点を探ろうとするであろう。こうした台湾に対する働きかけのほか、中国政府は過去の総統選挙と同様に、「台湾独立」に対する国際的な包囲網を確認し、時には誇示することで、民進党の対中政策や総統選挙戦に間接的な影響を与えようとするであろう。こうした中国の対台湾政策、およびその結果として存在する中台関係の現状に対してどのような判断を下すのか、来年の総統選挙において台湾の民意が改めて問われることになる。

特集
もと
台湾研究の素
—わたしの出会った〈資料〉—

「土匪」と台湾民主国

新田龍希（東京大学大学院）

日本統治期、とりわけ統治初期の台湾史研究にとって、台湾総督府文書が重要な史料群の一つであるということは多くの研究者に共通の認識であろう。ただし、同文書は総督府が残した、主として日本語で記された行政文書であることから、統治者の視線が色濃く反映されたものである。そのため、利用する際には如何にして総督府の政策を批判的に検討するか、文書の「視線」を相対化するかが、課題となってきた。だがその妨げとなっているのが、台湾人（漢人）自身の記した史料が圧倒的に少ないことである。

筆者は主に統治初期の土地政策を研究しているが、台湾総督府文書、とりわけ地方の県レベルの文書や土地調査局の文書を読み進めていくと、しばしば台湾人により漢文で書かれた請願書や意見書などの文書を目にする。当時の新聞史料等が概ね統治者の意向に沿ったものであったのに対して、これらは統治者側のバイアスが比較的にかかっていない史料であると言え、利用価値が高いと思われる。

ここで紹介したいのは、1895年から97年にかけて台北地域を中心に活動した詹振という人物が遺した史料である。詹振は台湾割譲以降、台北の松山や南港地方で活動した「土匪」で、1897年5月8日の台湾住民の国籍選択期限を狙って台北の大稻埕を襲撃した際戦死した。その折に警察が「鹵獲」した物品の中に6通の書簡が含まれていたのである。残念ながら原文書は存在せず、写とその和訳しか存在しない（『密大日記』明治30年所収）。この書簡は総督府文書中にも収録されているが、

こちらは原文書、写とも残っておらず、和訳のみの収録である（簿冊番号 9111）。原文書が現存しないという問題を抱えてはいるが、統治初期の台湾人が認めた書簡はこれまでほとんど発掘されておらず、その意味で大変貴重な史料であると言える。いまその6通のうちの1通を見てみたい。丁酉元月18日（1897年2月19日）付、黄仁記（或いは黄仁）より詹振ら複数名に送られた書簡である。

傾接福成兄信，云内几人疑心欲取憑據，方肯行事，似此之論，切非正議，大丈夫處此亂世正當建功之候，凡事慎察明斷相機籌圖，何必拘執憑據，而誤大局。……總而言之，臺灣七省門戶，中國咽喉之要地，割臺實迫於勢，豈無恢復之志。咱若真心與較，上頭自能播置斷無坐視。蓋復臺之舉，中外各省千萬人計之非獨我等圖謀哉。何必遲疑不決而失機。今所痛惜者，前年十一月之變〔1896年元旦に台北城を襲撃した事件——注〕不遂幾乎，貽誤大局。幸喜八月以來，列位聚眾與鬧，稍有轉機，但朝廷謀事十分週密，事未到時又防倭寇細作，豈肯先發憑據，洩漏機關。況中外同盟，九月立約，德付軍裝，俄兵屯扎暉春，非滅倭為遂之計，此乃確情，天下周知非弟誹謗。諸君聚眾，出具本心，非弟播弄既敢抗拒。何怕在大街市較鬧，使天下人周知，以慳上頭之心，共成共事，豈不美哉。何必區區困守山林，有何益哉。去年仁和兄到廈議戰，上頭恐咱不濟，示以自強之法，為後日內應一助。安肯輕舉，敗傷銳氣。今所諭乃乘軟之謀，至精至微，無害於事，則合萬國公法，二則試咱真心行事，三則使外國與之計較，不然兩相拒敵，何必焚毀洋行。以此計之其情可知，奈何諸君，遲疑不決莫怪上頭輕視。凡謀事知進退，識時勢，明理慎斷所為計之善耳，何愁大事不成。伏乞舉諒信心速行，憑依上諭（一字不明）選，勇敢數百人，暗到艋舺城邊，焚燬官衙洋行，及日本住屋，并關署橋路，相機大鬧……則朝廷信心籌助黑旗定為外援，四方義士無不悅從，一則可合公法，各國必出講和，一則俄德有因方能發兵救護，一則亦理有法，百姓歸心，一

則日本不能發兵救護，倭勢必頹然……若以拿獲取利為能事，民心哀怨豈能久持。萬一軍心散漫，那時悔之莫及，事次速行為上策。況機會難逢幸勿錯誤。……前付檄文發貼街市，要所聞眾使洋行抄傳各國週知。……

但檄文，總統副百里璽，以及民主國虎印，乃上頭所製，至期便詳。諸君若有真心謀為，天神共鑒中外周知，定有出頭日期。斷無虧負騙騙，敗誤大局。伏望速行，勿生疑念。……

書簡の内容としては、まず「上頭」から下った上諭が確かなものであることを強調している。行間

からは台湾島内の「土匪」勢力が上諭に対して相当の疑念を抱いていることが窺える。またこれと関連して、機を逸することなく速やかに襲撃を実行せよと命令している。そしてその作戦としては台北の大市街である艋舺や大稻埕の官衙や洋行、日本人家屋を狙えとある。この「上頭」が誰なのかは明らかではないが、「密大日記」所収史料では「劉永福ヲ指スナラン」と推測されており、他方総督府文書中の和訳では「本国長官」と訳されている。「……民主國虎印乃上頭所製」と書いていることから判断すると、劉永福の可能性は否定出来ない。いずれにせよ清朝に何らかのかたちで関係する／した人物であるらしい。そして彼が下した上諭に対して島内勢力は懷疑

的であった。しかし実際には5月8日に大稻埕襲撃を決行したのであった。

当然、この書簡の記述が全て確からしいとは思われない。ただ興味深い点がいくつか認められる。まず、この書簡の発信者が廈門にいるらしいことである。「上頭」が対岸から台湾島内へ作戦を指示するという構図が見受けられる。その中で発信者の黄の位置は複雑で、「上頭」の指示を受ける立場であることは明確だが、詹振らとの関係では「咱（我々）」と「諸君」を併用している。いずれにせよ当時の「土匪」のネットワークを考える上で廈門が重要な地であることが諒解される。

また、列強の協力や万国公法の遵守といった論理が散見される。このような論理が台湾民主国に多く見られることは黄昭堂氏の研究等で明らかにされているが、1897年時点でも同様であることに驚かされる。独・露の協力まで明言されている。加えて、「朝廷」及び黒旗軍の支援が記されていることも同様の意味で興味深い。

さて、この書簡末尾の「黄仁記緘」と記された下に印と思しきものが記されている（図1）。これは写にのみ記されており、総督府文書中の和訳には記されていないのだが、日本人官吏が原文書を抄写する際に描いたこの絵柄では、中央には虎の画があることが示され、その上部に「台湾民主国」、左に「土坦幣」、右に「錢」の文字が見られる。これは台湾民主国の発行した郵便切手の絵柄と同様である（図2）。「緘」と記されていることから、この部分は実際には書簡の末尾ではなく、封書の表面を抄写したのかもかもしれないが、これ以上の情報がないので確かなことはわからない。ただし、重要なのは、1897年2月に廈門から送られた書簡に、台湾民主国の「スタンプ」が押されているという事実である。

この事実は、1895年10月に劉永福が廈門へ逃亡したことを以て「国家」としての台湾民主国は滅亡したとする黄昭堂氏の説を否定するものではない。それに、大稻埕襲撃に関わった陳秋菊や徐祿等が、襲撃と同時期に「台湾民主国征北大將軍」と名乗って英国領事宛に稟書を呈したり、それ以前にも「土匪」の中で台湾民主国の名を冠した勢力が存在した事実は以前から指摘されている。た

大政不易

檄文未安、誰此謀事、後論治又、

黄仁記緘



△ 書簡の「印」



△ 台湾民主国の「土坦幣」（第4版、32cm×32cm）（国立台湾博物館ほか『黄虎旗的故事』2002年）

だしこれらの事実、「土匪」研究の第一人者である陳怡宏氏によると、単なる対外的な政治語彙のレパートリーの一つとして利用したにすぎないとされていた。しかし、廈門から送られた、「土匪」勢力内部に宛てて送られた書簡に台湾民主国の「スタンプ」が押されていた事実は、この解釈の再考を求めているように思われる。陳氏が利用したのは総督府文書内の同書簡和訳であったことから「スタンプ」は記載されておらず、結果としてこのような見解に至ったとも考えられる。和訳史料のみを参照すると解釈にまで影響しかねないのである。

求められるのは、残された数少ない漢文史料を積極的に「発掘」し、そして断片的なそれらを紡ぎ合わせて歴史像を不断に再構築していくことではないだろうか。たとえそれが遅々たる歩みであったとしても。

キモノのおばさん

坪田=中西美貴（日本学術振興会・特別研究員、上智大学）

台湾先住民族の歴史的経験を研究している人であれば、必ず一度は『理蕃誌稿』や『理蕃の友』といった、先住民族統治に関する資料を手にとることだろう。それらは統治者側から書かれているという限界はあるが、書き手たちの本音に触れることで、生き生きとした時代的切迫感や意気込みを読み取ることができ、時間がたつのを忘れて読み込んでしまうことだろう。

私もまたこれらの資料に魅了された一人だが、それ以上に魅了され、ここまで導かれてきたのは、実は宜蘭県に住むタイヤル族のおばさんたちとの、ある夏の日の南澳駅前における「出会い」である。

駅前の広場にはイベント会場のようにステージが組まれていて人であふれていた。間もなくそれは野外結婚披露宴だということが分かり、招待客の中には村長や県庁の職員もいるようだった。しばらくしてステージで余興が始まった。遠目であったが、揃いの服に、羽根つきの扇子を持った初

老やそれ以上の年齢のおばさんたちが踊っている姿が見えた。その瞬間、私は回れ右をしておばさんたちを視界から消してしまった。一瞬何を見たのかよくわからなかった。いや、本当は何を目にしたのかすぐに分かったのだが、直視し、それを受け入れるには衝撃が大きすぎた。それは、キモノをまとったおばさんたちだったのだ。

キモノを着るとは

現在の台湾、いやかつて日本の植民地や支配地域にあった場所で、今もキモノは着られているだろうか？答えは条件付きでイエスである。たとえば台湾の大学で日本語学科が設置されていれば、日本語学科ウィークには、どこかで購入してきた浴衣を着ている学生の姿を見かけることができる。だがそれは、その場限りの行為で、まさにイベントで着るコスプレのようなものとして消費されているのであって、日常的に着られているわけではない。

では日本統治期、キモノはどのように着られていたのか。現在浴衣を着る学生たちの祖父母、曾祖父母世代の漢族系の台湾人、なかでもエリート階層にとってのキモノとは、統治権力と結びついたものであった。たとえば1920年代に日本に留学し、台湾議会の設置問題や男女のありかたを紹介していた『台湾青年』では、台湾に戻ったら和服は脱いで台湾の服を着るべきだと語られ、1942年にもある女性が『民俗台湾』の中で、和服も台湾服も自然なものとしては着られないという困惑を語っている。漢族系台湾人男女のすべてではないとしても、かれら・かのじょたちエリート青年の中には、衣服の選択、なかでもキモノを着るか着ないかということは、たんに個人的な嗜好の差であるばかりでなく、民族的な対抗を含む政治的な選択的行為として、やっかいな存在だったことがうかがえる。

同時期の台湾先住民族にとってはどうだっただろうか。1935年に行われた「高砂族青年団幹部懇談会」では、内地人を真似た身なりをして満足していることへの批判が先住民族のエリートによって述べられている。もちろん台湾総督府主催の会議であるため、それはキモノを着ること自体への

批判というよりは、形の真似ばかりが先行し、精神性が伴っていないという批判の形態をとったキモノ着用を含む日本人の身なりの真似への批判であった。この意味で、漢族系と先住民族とを問わず、1920～1940年代の被統治者エリートたちの少なくとも一部にとって、キモノとは単なる衣類の枠を超えて、政治的な意味合いを持ち、着るにためらいを覚える存在であった。

だが私が目にしたおばさんたちのキモノ姿からは、政治的な意味合い、つまり、着るか着ないかは一大問題という姿勢は皆無のように見えた。キモノを着ることへの屈託のなさ、あるいはおばさんたちがかつて、先住民族エリートと呼べる若者ではなかったからかもしれない。仮にそうだったとして、おばさんたちとキモノの関係性について、もう一つ疑問が残っていた。それは、キモノそれ自体についてである。

それはキモノではない？

おそらくそこで踊っていたおばさんたちは1920年代前後に生まれたと考えられるが、彼女たちが着ていたキモノは、振袖や留袖といった長着ではなく、むしろ浴衣のような形態で、柄も和柄というよりは中華風な柄であった。後にキモノについてのインタビューを行った際、ひとりのおばさんが、自分で作ったというものをを見せてくれた。それもまた、どちらかという中華風の柄の木綿生地で作られていた。そして驚いたことにそれは手縫いでなく、ミシンで縫われていた。おばさんが日本時代にキモノの裁ち方縫い方を学んだことがあったならば、それは間違いなく手縫いだったはずである。それがミシンに代わっているということは、駅前での披露宴で踊っていたおばさんたちのキモノもミシン縫いだったのではないだろうか。そうであるならば、どこかでミシンでキモノを縫う講習会のようなものが開かれたということではないだろうか。

ここで指摘したいのは、おばさんたちが着ていた、あるいは作ったキモノとは、形は確かにキモノなのだが、柄の選択や縫い方は、正統的なキモノというものを仮に設定するとして、そこからはズレた存在だったということである。

なぜおばさんたちは、現在もキモノのようなものをミシンで縫ったり、着たりするのだろうか？何を着るかの選択は、1920～40年代の被統治者エリートたちのように、帝国内での生き方を含む、民族性とかかわる政治的な問題であるだけではない。どのようなものを選ぶかは、自他を分ける主体的な行為の問題でもある。だとすると、タイヤル族のおばさんたちが示しているキモノを着ることとは、どういうことなのだろうか。ここから発した問いは、数年を経た2008年に「日本統治下の北部台湾における先住民女性と和服—タイヤル族を中心に」としてまとめ、『女性学年報』に掲載された。

見てはいけないもの？

踊るおばさんたちに背を向けた時、何か見てはいけないものを見たのではないかと思った。それは、キモノと呼んでよいかをためらわせる衣服をまとっていたからでも、キモノに羽根つき扇子という「間違った」組み合わせを見たからでもなく（この組み合わせ自体も興味深い）、戦後60年以上経った現在、植民統治の経験者がキモノを着て公共の場にいるということに、違和感を覚えたからである。

その後のフィールドワークでも、おばさんたちは嬉しそうに自分で縫ったキモノや、訪日時に購入したキモノを見せてくれたが、私自身はその度ごとに、キモノとの距離や意味をどう測るべきかを迫られた。

今から思えば私はキモノに、被統治者エリートたちが経験した衣服の政治性を読み込んで、おばさんたちがキモノを着るという行為を目にしたほかの人たちもまた衣服の政治性を読み、それを親日的行為とみなしてしまうのではないかと危惧したのであろう。

だがキモノを着たり購入したりする行為の意味を誤認していたのは、むしろ私自身だったのではないだろうか？キモノを政治的なモノとしてのみ取扱い、キモノ＝植民地支配の体現として読むならば、それを現在まとう姿は、親日という枠組みから抜け出しにくい。しかし、時にそうではない読み方があるとしたら？

おばさんたちの姿は、私が読んできた文字資料上の植民統治に関する知識からは理解できないものだった。しかしあの日のおばさんたちの姿は、私に「見る」ことを迫っていた。そしてそれを通じた、おばさんたちにとっての植民統治がどのようなものだったのかを理解しなおす機会を投げかけていた。私はおばさんたちが投げかけていたものを、的確に捉えてきただろうか。これからもおばさんたちの植民統治経験について、その姿を追い続けていきたい。

劉爺爺と眷村

白 佐立 (東京大学)

筆者はこれまで建築学分野において戦後台湾の都市住宅史について研究を進めてきた。ただし、「建築」史とは言っても、筆者が対象としているのは「モノ」そのものではなく、ヒトの生活と空間との関係性である。

本稿では、一般的に考えられるような「資料」ではないかもしれないが、私の研究の方向性を修正してくれ、悩んでいることに対してヒントを与えてくれるような「資料」を紹介したい。その「資料」とは、とある眷村に住む外省人のお爺さん劉爺爺と本省人の奥さん劉婆婆と私の7年間のつきあいの総和である（ここでは便宜的に「資料」と呼ぶが、決して劉爺爺、劉婆婆のことを「モノ」として扱っている訳ではないことを申し添えておく）。

私が初めてこの夫婦に出会ったのは2008年夏、日本人の後輩と共に様々な眷村で聞き取りや実測をしていた時の事である。眷村とは大陸から台湾へやってきた軍人及びその家族の住まいとして国軍により管理された住宅団地を指す。都市部に多いのだが、一般に眷村は外部の台湾人社会から隔離されており、住民は本省人との接触があまりなく、「過客心理」を有しているとされる。また国軍との繋がりが強いいため、住民同士の連帯意識も強いとされる。

*

劉爺爺の住む眷村は空軍により建設された眷舎と、そこに隣接する工場の廃屋からなる。工場の廃屋には10世帯弱の軍人家族が住みついていたが、こちらは「不法」占拠であり、彼らの住宅は「違法」建築である（とはいえ国軍の眷村であることに変わりはない）。なお劉爺爺の家は眷舎の方である。私たちはまず里長に挨拶に行き、この眷村の調査を希望したところ、里長は劉爺爺と連絡をとってくれ、劉爺爺が調査の協力を買って出してくれた。そして劉家を調査する前に眷村全体を案内してくれ、隣人たちに私たちのことを説明してくれた。

私たちと劉爺爺が工場の廃屋を見て回っていると、湖南省出身の住人楊爺爺が突然私たちに対し、「お前は漢奸だ。なぜ日本人なんかを連れてくるのだ。日本人さえいなければ私はここ〔台湾〕に来る必要などなかったのだ！」と怒鳴ったのである。私がびっくりしていると、劉爺爺は「なぜそんなことを言うんだ？子供に言ったって通じないだろう。この日本人はあなたが恨んでいる日本人とは違うんだ」と言って、私たちをその場から連れ出した。そして劉爺爺は、「彼は湖南出身なんだよ。湖南人は性格が悪いから、あんまり気にしないでくれ。戦争を起こした日本人は確かに悪いけど、彼はその日本人じゃないんだから。彼が悪いわけじゃないのに、なんでそんなことを言うかなあ。まあ私の家に行きましょう」と慰めてくれた。私のそれまでの台湾でのフィールドワーク調査の経験では、日本人は嫌われる対象というよりもむしろ、日本人と共に調査した方が調査がうまくいくことが多く、日本人を眷村に連れて来たことの重大さを考えてもいなかったのである。

その後劉爺爺は自宅に案内してくれた。爺爺の家は細長い敷地に建っており、入ってすぐが客間で、その後ろに3つの寝室が繋がっており、さらに奥には食堂、台所、浴室があった。そして家の裏には庭があり、庭の端に離れがあった。その中で最も私の目を引いたのは、客間に隣接した部屋に設えられた「総舗」であった。総舗とは台湾漢人の「伝統」家屋において、部屋の半分ほど、もしくは一面に設えられる揚げ床を指す。靴を脱い

で上がる空間で、感覚的には「和室」のようなものである。これは本省人住宅に特徴的な設えと考えられているので、外省人が暮らす眷村の中で総舗を見かけるとは思ってもいなかったのである。しかし考えてみれば、この家には嘉義出身の劉婆婆も長年住んでいるのであり、実家にあった総舗とそこでの靴を脱いでくつろぐ生活様式を持ち込んだのも自然のなりゆきであっただろう。外省人（とりわけ一代目）と本省人を別個の集団として考えがちであったが、人々の生活様式は截然と分けて論じることができるようなものではなく、自然に重層し、融合してゆくことに気づかされたのであった。

眷村は老朽化や世代交代、都市更新などの理由から、1990年代以降急速に再開発の対象となり、都市から姿を消していくこととなった。劉爺爺の住む眷村も、2013年には取り壊されることとなり、夫婦は眷村を離れることとなった。取り壊しの際に政府からあてがわれた高層マンションは息子家族に譲り、元の眷村のすぐ近くの古いアパートに引っ越した。私は長くお世話になっていることもあり、台湾に帰る度に夫婦のアパートに挨拶に行くことにしている。行くたびにたわいのない話をして過ごすのだが、あるとき交わした会話は以下のものであった。夫婦が移ったアパートは元の眷村の家よりも狭く、爺爺が大事にしていた盆栽や、庭に植えた大きな竜眼の樹は持ってくるできなかったのもので、そのことを爺爺に尋ねると、盆栽は人にあげたのだが、自分は毎日「老家」まで散歩して、竜眼の樹の様子を確認しているのだという。またアパートの客間にはDVDラックが置いてあるのだが、私がどんな映画を見るのかと爺爺に尋ねると、それらは全て「家郷」から買ってきた湘劇だという。そして、今の住居のことを「家」と呼び、高層マンションは「新房子」と呼ぶ。しばしば外省人一代目にとっての故郷は中国大陸だと言われるが、実際にはそれほど単純ではない。故郷は「国境」により裁断されるようなものではなく、人が人生を過ごしてきた空間なのであり、時に複数存在することだってあり得るのである。

今年の旧正月にも私は爺爺と婆婆に新年の挨拶をしに行った。客間の壁にはこれまで見たこと

ない写真が飾られていた。以前の眷村の住民たちの集合写真であった。爺爺は写真を見ながら、自分と同じ世代の人はもうほとんど亡くなってしまったと言いき、私が初めてこの眷村に調査をしに来た時の出来事を思い出し、写真の中の楊爺爺を見つけたと言った。「いたいた、あの湖南人。楊姓の人。あなたたちを怒鳴りつけた人。彼も去年亡くなったよ。彼はとても日本人を恨んでいたね！彼の家は違法建築だったから、新しいアパートに住むには高額のお金を払わないとだめなんだよ。私は少しのお金を払うだけでよかったんだけどね。」空軍が建設した眷舎に住んでいた劉夫婦は、取り壊しの際に手厚い補償を受けた一方、楊爺爺の様な「違法建築」に住む住人はその待遇に大きな差があったのである。選挙の際の、国民党の「鉄票区」のイメージに代表されるように、眷村はしばしば一枚岩のような存在として外からは捉えられるが、実際にはその中でも複雑な事情があり、また明確な格差もあるのである。

劉爺爺が楊爺爺の話を終えると、話を聞いていた劉婆婆がぼそっと、「彼も日本人を恨んでいたかもしれないけど、私だって日本人を恨んでいるんだ。2歳の時にお父さんが日本人の軍夫になって、村から出ていったきり帰ってこなかった。私の村の男60人余りはみな軍夫になったけど、一人も帰ってこなかったんだよ」と言った。いつも家族のように接してくれる婆婆からこの話を聞かされた時の衝撃は大きかった。彼女は「本省人」だし、これまで何度も自分の沖縄旅行の体験を楽しそうに語ってくれたり、日本は清潔でいいところだと言ったりしていたので、私は勝手に婆婆は「親日的」であると勘違いしていたのである。彼女の感情を決めつけてかかっていた私の傲慢さを痛感させられた。日本への「憧れ」を抱きつつも、過去の記憶がもたらす日本への怒りが劉婆婆の中には併存しているのであった。

*

劉爺爺、劉婆婆とのつきあいは、既存のイメージに寄りかかって対象を見ていたのでは、対象の持つ複雑で繊細な意味を理解することができないことを私に実感させてくれた。その意味で、人との「つきあい」も一種の「資料」なのだろうと思

う。台湾研究においてオーラルヒストリー（口述歴史）はすでに多くの蓄積があるが、これらの多くは予め設定したテーマに沿って、特定の対象の話を記録するものであるように思われる。だが、筆者は相手とじっくりつきあい、一定の信頼関係を築き上げた上で何気なく語られる話にこそ、既存のイメージを批判的に検討し、ものごとの複雑性を掴むことのできる可能性が秘められているように思うのである。

ジョージ・H・カー文書の導いた出会い

泉水英計（神奈川大学）

沖縄をフィールドに文化人類学を学んでいたが、6年前の春休み、初めて一人で台北に降り立った。まっすぐに二二八紀念館に向かい、「カーの資料が見たい」と来意を告げる。一般利用には供していないと教えられ、渡台前に問い合わせなかったことを悔やんだ。それでも謝館長の好意で目録を見せてもらおうと、沖縄に関係しそうな文書が見つかった。結局、一筆書いて利用許可をもらい、短い滞在と知った職員が休日出勤までして複写作業してくれた。深謝したかったが片言の北京語すら話せず、また、台湾に知人もおらず、文字通りただ黙々と資料に向かった1週間であった。

当時の私の関心は、沖縄の長期保有を前提に米軍がおこなった琉球列島学術調査(SIRI)にあった。人類学者の民族誌に加え、公衆衛生や天然資源開発を含む総合的な共同調査プロジェクトだが、そこに混じってジョージ・H・カー(G. H. Kerr)の琉球通史がある。欧文で唯一の類書として今日まで広く読まれているが、沖縄の教科書用に翻訳されたこともあって、日本からの施政権分離を正当化するプロパガンダだったのではという猜疑心にもさらされている。

沖縄県公文書館にある彼の個人文書に取り組みはじめた頃だった。軍や国務省の公文書の写しや未刊原稿、カーボンコピーを徹底させた往復書簡、研究や講義用のノート、レジメ類、抜刷り、切抜

記事、走り書きのメモから、私的な写真やパスポート、スケジュール帳、生活保護の受給記録まで、「紙」を捨てることができない性分であったという彼の残した資料に圧倒された。史料読解の訓練を受けたことがなく、自己流の暗中模索で脱線や回り道を繰り返したが、アントニー・ジェンキンズ氏が作成した精緻な目録に助けられ、個人文書から開かれていく一つの時空間に没入する楽しみを覚えはじめていた。「台湾関係」と分類されている大項目が気になっていたが、「まとまった資料が台北にもあるらしい」と仲本専門員からうかがい、この伝聞の伝聞だけを頼りに二二八紀念館を訪れたのであった。

沖縄のカーは良くも悪くも琉球史家であったが、台湾では何よりも先ず、二二八事件の目撃譚 *Formosa Betrayed* の著者として知られていた。そのギャップがひとつの研究課題を示しているように感じられた。沖縄も台湾もともに、戦前は日本の南の境界に近接して活発に交流し、戦後は米国の東アジア戦略により日本から切り離されて冷戦期の年月を歩む。今日両者の比較研究が盛んとなっている所以であるが、20世紀中葉の2つの社会を貫く1本の糸としてカーの半生は類い希な情報源となるだろう。日米開戦前に台北での教員生活で培った人脈が戦後の沖縄調査を助け、米海軍で台湾侵攻作戦計画をともした同僚たちが沖縄軍政府で活躍し、台北副領事時代には、帰郷を阻まれた沖縄人引揚げ者の救済に奔走している。カーの足跡を追うことで、意図せずに、両地域を往来してきた様々な人々の人生を垣間見るようになった。

カーと彼が関係を結んだ人物との追跡はまた、彼の文書がなかったならば縁も無かったような場所へ足を運ぶ機会を与えてくれた。台湾大学図書館や国立台湾図書館、国史館台湾文献館には、戦前戦中の台北論壇で活躍した人々の記録、あるいは戦後の留用で台湾に残った沖縄人や日本人の記録があった。カーは二二八事件中に米軍の介入を画策したとして台湾を逐われる。帰国後に奉職したスタンフォード大学のフーバー研究所には、台北領事館から観察した国民政府の台湾接收を伝える記録が主に残されていた。ワシントンの海軍図

書館や議会図書館、公文書館には、戦中の台湾軍政府計画の公式記録があった。他にも、一時的に教職を得たワシントン大学やカリフォルニア大学には、カーが台湾から持ち帰った引揚げ者の旧蔵書籍を土台に東アジア文庫が形成されていると聞く。また、晩年を過ごしたハワイにもまだ資料が残っているようだが、いずれも未見である。

各地に分散していても一度は同一人物の手元を通り過ぎた資料だから、パズルが合うように一連のものとして繋がるときがある。一例をあげると、1946年に総督府跡の廃墟で避難生活を送っていた沖縄人たちが、悪化する難民キャンプの衛生状態を「アメリカの高官」に伝え援助を求めたことがあった。二二八、フーバーそして琉球大学附属図書館のカー文書をつなぎ合わせると、沖縄人指導者たちが戦前からの人的繋がりを頼りにカーに仲介を求め、彼が領事館報告としてまとめて救済を上申したことが明らかになる。

資料探索の途上で別の纏った資料群に出会うことも多い。2011年の夏休みにカー文書の収集に沖縄に滞在していたとき、たまたま観たテレビ番組で、川平朝申という沖縄文化人の個人資料が那覇市歴史博物館に寄贈されたことを知る。台湾引揚げ時の沖縄人指導者の一人であり、戦後のカーの沖縄調査を手伝っていただいたので、カーが写ったスナップでも見つければ幸いという程度の期待で翌日訪れた。ところが、蓋を開けてみると、戦前の台北文化人のネットワークの一端と、そこから戦後の沖縄民俗研究への連続を具体的に示す一群の書簡があり驚いた。より一般に、沖縄社会の戦後復興における台湾引揚げ者の貢献を証す資料群であり、川平の多才を反映して児童文学、放送史、音楽史、映画史など多分野の注目を集めはじめている。私には、川平の琉球結核予防会での活動を通じて、琉球列島学術調査の公衆衛生分野を改めて検討する機会にもなった。

二二八記念館のカー文書は、渡米して医業に就いた台北高校尋常科の教え子・籙成美氏が保管していた資料を購入したもので、同館の現蔵資料の大半を占める。最初の披露の機会となった1999年の特別展「被出売の台湾—葛超智文物展」に足を運んだという本学会会員もおられるだろう。米

軍の公文書の写しと、連合軍救済復興機関（UNRRA）の活動資料とが中心だが、高官から学生まで台日米の様々な人物と交わした大量の書簡がとりわけ興味深い。また、戦前台北で西川満が流行らせていた豪華な装丁の文学書や松山度三の民俗写真なども相当数ある。受け入れ時の資料整理を指揮した静宜大学の蘇瑤崇氏が監修した陰影本が出ていた。是非会いたいと思ったが、空港から台北駅に出るのに手間取っていた私には、台中の郊外まで顔も知らない人に会いに行く勇気がなかった。その後、同氏沖縄調査の機会にジェンキンス氏から紹介され、この一年半は数度にわたりカー文書の調査に同行させていただいている。最近、その蘇氏からのメールで、本年6月に二二八記念館が2度目のカー展を開くことを知った。彼も加わった *Formosa Betrayed* の新訳が出て改めてカーが注目を集めているようだ。オープニング・イベントに誘われて、6年前の孤独な訪問を思い出さずにはいられなかった。研究の本分ではないかも知れないが、資料を通して得られるこのような知己もまた、その資料のもつ魅力なのではないかと思う。

台湾語研究の新たな可能性

陳麗君（国立成功大学）

近年、台湾新移民を対象に社会言語学的な研究をつづけてきている。2014年は200年ぶりの潤9月（旧暦上では9月が2回連続）のため、お正月は従来よりも遅く2015年2月19日になり、一ヶ月間得たはずだった。フィリピンにも出向き、日・台・菲の移民実情を探っているのだが、相応しい成果があまり出せなくて実に心細い日々を送っている。去年行ったことを振り返ってみると、大きな仕事が2つ挙げられる。一つは10月末に主催した「第十回台湾言語とその教学国際学術シンポジウム」で、みなさんのご協力のおかげで無事円満に幕を閉じることができ、ホッとしている。もう一つは『王育徳記念講座文集』（台南市

政府文化局出版、2014年12月発行)の序章の執筆だ。きっと読者の皆様に大いに笑われて不思議がられると思う。7000字の序章を書くのに一週間もいらなと思われの方が多いただろう。しかし、私は夏休み前に頼まれたこの原稿に、夏休み2カ月半を丸々費やしてしまった。とはいえ、これには少し言い訳をさせていただきたい。王育徳先生の貢献は絶大である。残された著作は台湾語学・文学・歴史学分野など多岐にわたり、また、その量も膨大である。加えて、1961年に創刊した評論雑誌『台湾青年』は42年間の発行年月を誇り、7, 80年代以後の台湾意識と政治変更に力を注いだ、当時日本やアメリカへ留学していた本島人知識人たちに多大な影響を及ぼした。しかし、れっきとした史料であるにもかかわらず、日本語で書かれているせいか、残念ながら台湾ではあまりよく知られていない。幸い、総美姐記念基金会在「総美基金台文站」というホームページを設け、『台湾青年』のデジタル化を図り、

台湾語訳も徐々に進展をみせている。この夏、私は新潟大学の学生頃に散見したこれらの資料を再度丁寧に読み直してみた。すると、目から鱗が出るほど面白いものが見つかった。台湾語研究の分野における王育徳先生の音韻研究(博論など)は、方言研究者である洪惟仁先生による紹介によってよく知られている。しかし、アクセント素で統合された発話段落がかなりの幅を持つことを明らかにし、それをういて構造文法論と文分析にアプローチしたことはあまり知られていないだろう。

アクセント素は、例えて言うなら橋本進吉文法の「文節」にあたり、服部四郎が「単語複合体」と呼んだ、二つあるいはそれ以上の単語かつ音

声のとぎれを含まない発話あるいは発話段落に該当する。韻律面から出発し、統語構造の解析に応用できる可能性があることは言うまでもないが、この数十年飛躍的な発展を届けてきた語用論や文法化現象の解明にも応用できると考えられる。話し手とコンテキストにまつわる諸要素と関わっているコミュニケーションの談話を解明するためには、談話分析・会話分析を行うためのコーパスと発話単位の認定が必要となるが、それにはさまざまな基準が提案されている。その中でもよく用いられているのは、Sacks, Schegloff, & Jefferson (1974)が提案した、話者交替に着目して区切った単位「ターン(turn)」である。しかし丸山らは、話し手と聞き手による相互行為としての単位を第一義に取る「ターン」を統語的な単位としてみなすことはできないとし、係り受け構造情報・重要文情報・談話境界情報を付与するための単位である「対話節単位」を提案した(丸山・高梨・吉田

2010)。このことから、統語・音韻・語用論のいずれの観点からも合意を得られるような形式単位の境界線を見出すことは難しいと語っている。

台湾語は声調交替が顕著に認められる言語である。文法的に音節が二つ以上固く連なって出てくるときに、そのアクセント素単位の最終音節だけが本来の基本声調を保つ。基本声調を保つ音節はアクセント核で、その前の音節が一定の法則にしたがって転調する。このような声調交代によって、アクセント素は一つの基本声調を保ったアクセント核を持ち、ひとつのはっきりとした単位となる。

例えば次の例は、単語、動詞句、単文ではあるが、いずれも括弧全体が一つのアクセント素であり、アクセント核は網掛けの場所にある。



吾人は天より与えられて
自分自身の思想の主人公
となる権利をもっている スズメダ

台湾青年 第四巻 目次

【目次】 台湾青年に書く ―祝賀の言葉にかへて― 1

レポート
台湾の食文化の分析 頁 1-4
キアロとセロ 頁 5-10
★龍社事件の隠蔽するもの
――プロダクション・システムの確立をめぐって―― 頁 11-13

随筆・痛い! 頁 14-19
高橋健一 14
林建雄 15
林建雄 16
小沢 17
小沢 18
小沢 19

連載 龍社事件 1 集一巻 頁 20-27
台湾語講座 第1回 台湾語の系統 頁 28-34

小説 盾の反面 頁 35-41
小説 岐路 頁 42-48
小説 続評 頁 49-55
東京の中国留學生型をめぐって 頁 56-62

原稿募集

下記の範囲で、みなさんの積極的な
応募を期待しています。
①詩・随筆・小説
②400字(19-20枚)
短文(断片)は出
刊を要しないこと
③原稿は必ず
④原稿は必ず
⑤原稿は必ず

◆原稿は必ず
◆原稿は必ず
◆原稿は必ず

話 (ōe) 話し
講話 (kóng-ōe) 話しをする
汝毋通遮爾厚話 (Lí m̄-thang chiah-nī kāu-ōe)
君はこんなにおしゃべりをするな

王育徳の『台湾語初級』では、全文にアクセント素の括弧づけが行われており、アクセント素による台湾語の形式構造が考察されている。そして、同書の付録補講には次のようである。アクセント核の所在は原則として (1) 主語 (指示詞の場合は例外が多い) (2) 介詞の目的語 (3) 「è」の前 (4) 二者択一の疑問文におけるそれぞれの命題 (5) 文末 (王 1993: 162)。また「福建語法の研究—構造的な文法論の試み—」(1983) では、アクセント素を利用して、単語より大きく、文より小さい 13 種の統語構造が作られた。中嶋幹起 (1972) は、王の『台湾語常用語彙』(1957) と「台湾語講座」『台湾青年』(1960) に基づいて、統語論的な観点から声調交替の考察を行っている。台湾語における統語構造の上から基本的と認められる諸形式が種々の関係で統合されている場合、音声交替を起こして形成された声調グループとは、この統語関係を反映させるための音声面での現象であると結論付けた。さらに、アクセントの所在の形成原則について例を挙げてみる。次の例では、主部 (指示詞以外) と述部の最終音節がアクセント核を持ち、これは主題 (topic) と主題に対する言及 (comment) 構造とも言える。そこから一歩踏み込んで、テーマとレーマの情報構造で対照してみると、それぞれのアクセント核に重要情報が置かれているという仕組みが見えてくる。

阿娥 | kā 汝講啥物 (A-ngô | kā lí kóng siá"-mih)
アガは | 君に何を話した
汝 kā 阿娥 | 講啥物 (Lí kā a-ngô | kóng siá"
-mih) 君はアガに | 何を話した
阿弟 è 餅 | 予狗 | 食 ah (A-tī è piá" | hō'káu|
chiah-ah.) ぼくのおかしは | いぬに | 食べら
れた

上記の文で、記号「|」に区切られたアクセント素単位を発話情報の伝達単位と見なすことも可

能である。したがって、これらのアクセント素は、統語的・韻律的そして談話的な情報構造を備えた単位である可能性が考えられる。そこで、重要情報にアクセント核を置くことについて、声調交替による軽声の現象を挙げてみる。

來 (lài) 来る
過來 (kòe-lài) おいて
走過來 (cháu-kòe-lài) 走ってくる

このように「來」は、動作性動詞から動詞趨向補語になった場合、動詞「来る」の意味内容が弱体化して、方向性を示す機能語になる。このような軽声化 (記号「-」で示す) 現象では、もともと最後の音節にアクセント核を置きつつ、そこに重要情報を持たせていたものが、軽声化によって前の節にアクセント核が移動すると同時に重要情報も前に移行する。このように、動詞から趨向補語になったものにはほかにもいくつかの例がある (詳細は樋口靖 2008 を参照)。たとえば、-過去 (ていく)・行-入來 (歩いて入ってくる)・行-出去 (歩いて出ていく)・飛-起 lih (飛び上がっていく) などである。しかし、これらの補語には動きや方向性といった具体的な意味が失われ、話し手にもとづく時間の意味が付け加えられる現象もしばしば見られる。たとえば、「熱-起來」(暑くなってきた) には抽象的な時の意味が新たに付加される。このような変化の過程は文法化現象という。台湾語の文法化研究は面白く且つ未開発の領域で溢れている。先ほど挙げた基礎語彙の動詞だけでなく、名詞または数量詞の例もある。

後日 (āu-jit) 後日
(āu-jit) あさって
正月 (chià"-goeh) お正月
(chià"-goeh) 一月
先生 (sian-si") 先生
(-sian-si") 敬称表現~さん
做人 (chò-lâng) 人として普段の行為
(chò-lâng) 嫁に出す
啉一杯 (lim chit-poe) 一杯を飲む
(lim-chit-poe) 飲む (何杯の制限がない)

以上、台湾語のアクセント素は語用論研究や機能文法に応用できそうな談話単位であり、文化現象の分析検証にもかなりの好材料であろう。研究素材がそうであるように、世界は思いよらないところで繋がっている。私は日本に留学したことで台湾語研究に出会い、社会言語学を皮切りに台湾原住民研究に接触し、いまは移民の言語伝承にまつわる社会構造の迷路に入ってしまった。しかし、「山重なり水複わり路無きかと疑うに、柳暗く花明るきところに又一村」であるよう、研究は意外なところで展開することを信じている。

わたしの出会った資料

星 純子 (茨城大学)

その昔筆者が修士課程に進学したとき、当時の指導教員はよそから進学してきた筆者に「台湾研究を志すにあたり、中国や日本に関する研究も網羅しておくこと。台湾に関するものばかり読んでも台湾研究はできません」という「最高指示」を下された。そんなの無理〜と震え上がった記憶があるが、日本研究は後に大いに筆者の研究を助けることになった。本稿のお題である「台湾研究の新たな課題や可能性について多角的にとらえ直すきっかけ」になるかどうかは分からないが、本稿では筆者の出会った資料として、日本の地域社会学の名著である福武直編(1965)『地域開発の構想と現実 I, II, III』東京大学出版会を紹介したい。

まず、なぜ日本研究か。博士課程に入り、「最高指示」などすっかり忘れていた筆者は、自分のフィールドである高雄県美濃鎮(現：高雄市美濃区)のダム建設反対運動にとどまらない豊富さに圧倒され、博士論文の視点をめぐって途方に暮れていた。そんな迷う筆者に、美濃の人たちは親切にも美濃に日本人が来るたびに紹介してくれた。美濃は「典型的」客家農村として台湾で意味づけられていたので、視察に来る日本人も多かったが、その中には合鴨水稲同時作で有名な農家ならぬ「百

姓」、農村社会学者など少なからぬ農業関係者がいた。彼(女)らと話していると、「農基法行政」や「農文協」といった言葉が頻出する。「あの〜、農文協って何ですか?」と尋ねてみると、前述の「百姓」夫人に「んまあー、農文協知らない人初めて見たわー」と呆れられるくらい筆者は日本の事情について無知であった。農文協(農山漁村文化協会)は日本で有名な農業関係の出版社で、農基法(農業基本法)行政は、1961年に制定された日本農業の近代化や効率化をうたう農業基本法にもとづく農政のことであると知ったのは、美濃での長期滞在を終えて帰国した後だった。今思えば、草の根レベルで頻発する日台交流で起こる「日本と台湾は似ているけど、お互いに重要なところを理解していないのでは?」というすれ違いの発見は、「最高指示」を忘れていた筆者にも日本の社会運動や地域社会について再考を迫ったといえる。

帰国後、日本農村社会学や地域社会学の研究を読むと、日本と台湾の様々な共通点や違いに気付いた。その中で必ず引用される研究が、本稿で紹介する『地域開発の構想と現実』(以下、本書)である。以下、簡単に著者と内容を紹介して台湾研究への応用を考えたい。

編者の福武直(1917-1989)は『中国村落の社会生活』(1947年)でも有名だが、戦後農地改革で地主制から解放された日本農村社会の民主化に関心を持ち、政治の丸山眞男、経済の大塚久雄とともに戦後日本の民主化に関心をもつ学者として知られた。しかし福武は、戦後民主化されたはずの農村が解体し、農民層が分会する様子に直面する。1956年に出版された『合併町村の実態』では昭和の大合併により、本書では全国総合開発計画(1962年閣議決定)により、それぞれ地域社会が自律性と枠組みを失ってより非民主的になる様子が鮮明に描かれている。

本書は3冊から成り、第1冊は「百万都市の幻想と実態」と副題して富山県新湊市を、第2冊は「新産業都市への期待と現実」と副題して青森県八戸市を、第3冊は「工業都市化のバランス・シート」と副題して三重県四日市市と静岡県富士市を調査している。この3冊では、自治体や住民が不在のまま中央によって決定された机上の開発計

画によって、自治体は何の産業的基礎もなしに自前の能力以上かつ借金頼みの予算を組まざるをえなくなり、その結果国一県一自治体という序列が強化される様子が描かれている。そして、「開発は、対自然的な取り組みでないのはもちろんのこと、地域と進出企業の直接的な関係として現象するだけにとどまらず、当該地域社会の全住民の生活になんらかの形で影響と変化をもたらすわけで、その及ぶところ、地域の経済、政治、行政、社会生活の分野にわたるのである。もはや住民のすべてが、それにかかわりをもつことなしに過ぎ、開発行政を見送ってしまうといったわけにはいかなかった」(同書Ⅰ、p.18)と地域開発の政治性を指摘する。本書は、このように地方自治や農地解放など民主化の完成したはずの戦後日本地域社会における巨大開発が、新たな政治を作り出す局面を的確にとらえており、本書の問題意識はその後の地域社会学や環境社会学に引き継がれた。例えば、青森県のむつ小川原総合開発計画が核燃サイクル施設建設へと変貌していく様子を描いた飯島伸子ら編『巨大地域開発の構想と帰結』は、本書と書名を似せることで同じ問題の構図を示唆している。

地域社会の埒外で決められる巨大開発が、新たな非民主的政治を作り出すという課題は、2015年1月に死去したU・ベックの「サブ政治」(『危険社会』)という概念が80年代後半に浸透して以降、目新しくはない。しかし、美濃の社会運動の実証研究をめざす筆者にとって、本書は開発や中央由来の補助金の持つ性質を考える際に有効な視点を提供してくれただけでなく、地域社会の政治を総合的に検証する重要性を提起してくれた。1996年の総統直接選挙を区切りとするならば、台湾で制度的民主化が完成して約20年経過したことになるが、美濃におけるダム建設反対運動はこの制度的民主化がまさに完成する時期に発生し、巨大開発の政治性をあらわにしていった。そしてその後も河川行政や国家自然公園設立をめぐる非民主的政治は続いている。

本書は台湾と日本の共通点だけでなく、違いについても考えさせられる。台湾の社会運動に中央政府の大量の補助金が投下されている目的は、台湾ナショナリズムにもとづいたナショナル台湾文

化の実体化である。官製台湾ナショナリズムが続くかぎり、政府は地域社会における台湾文化の実体化を欲しつづけるが、社会運動がその役割を引き受け、制度化しながら自らの目的を達成しようとするメカニズムは日本にはない。この台湾ナショナリズム由来の政府補助金は、台湾の社会運動や地域社会に独特の政治を生み出しており、筆者はこの政治について博士論文で論じることになった。

もちろん、本書は日本の地域社会学に批判されて久しい。本書は当時の巨大開発計画について自治体や住民不在のもとで中央省庁がトップダウンに計画したものであることを批判している。しかしそれを積極的に争って受け入れようとしたのも自治体や住民であるという批判がジョン・ダワーの『敗北を抱きしめて』に着想を得た「開発を抱きしめて」という概念で近年表されるようになった。東日本大震災で明らかになった原発立地自治体の原子力への依存ぶりは「抱きしめる」の最たるものである。台湾でもそれは同様で、美濃ダム開発計画が美濃の一部の政治家やその支持者の熱烈な支持に支えられていた局面を忘れてはいけない。策定する中央→それに抵抗する地域社会という構図はあまりに単純であり、今後の研究はより多面的に地域社会を考察していく必要がある。

しかし、分厚い実証に支えられて巨大地域開発の問題の構図と政治性を示したという点で、本書は今も十分価値を持つ。民主化後の台湾研究にこそ、本書で示された「古くて新しい問題」が新たな視点をもたらすのではと考え、ご紹介する次第である。

「日本語文学」が読めるようになった頃

和泉 司 (豊橋技術科学大学)

台湾の文学について研究を始めた頃、必ず聞かれたのは、「どうして台湾のことをやるの?」という質問だった。1990年代後半、私は日本文学の大学院修士課程に在籍中で、そこでは「日本のこ

と」を扱うのが当たり前。旧殖民地文学研究は、そういう研究の存在は知られていたものの、「日文で扱うものなの？」という考え方が強かったのだった。

私が大学院進学当初関心を持っていたのは「上京する青年」と「近代学校制度」だった。近代以降、立身出世を夢見て上京する青年たちが、その手段として上級学校進学を目指すという仕組みが日本でできあがっていくとき、実際にその仕組みに参加した青年達と日本社会の変化について考えたい、それを描いた文学テキストを読んでいきたい、と思ったからだ。大学学部の卒業論文で、明治時代の「上京する青年」について調べた（つもりになっていた）私は、修士課程では「その先」として、大正・昭和初期について調査を進めた。そのとき、明治末から大正にかけて、中国、韓国、さらに台湾から多くの「留学生」が東京に集まっていたことを知った。東京が、アジアの青年達にとっての「近代化の中心地」となっていたことに、私は興奮した。

ちょうどその頃、所属していたゼミの先輩が、大正～昭和の総合誌『改造』の研究会を開催しており、そこで発表をしてみないかと誘われた。そのとき、私は学部時代に旅行した台湾のことを思い出し、『改造』の中の台湾関係の記事を集めて報告しようと考えた。そこで見つけたのが、龍瑛宗「パイヤのある街」だった。

龍瑛宗は留学経験こそなかったが、殖民地下の教育によって日本語を身につけ、日本の総合誌の文学賞に投稿して入選したという事実と、そのテキストの内容が「立身出世を目指す青年」であったことに、私は惹き付けられた。

しかし、『改造』本誌は大学図書館で読めたものの、日本統治期台湾で発表されたテキストはどんな雑誌に掲載されて、それはどこで読めるのか、全くわからなかった。当時はインターネットもようやく大学に回線が届くようになったばかりで、私は自分のPCも持っていないような状態。調べる手段は、まず大学図書館で関連研究書を探すことしかなかった。

そこで見つかったのが、垂水千恵先生の『台湾の日本語文学』、下村作次郎先生の『文学で読む台

湾』、河原功先生の『台湾新文学運動の展開』、藤井省三先生の『台湾文学この百年』だった。これらを読んで、まず『文藝台湾』と『台湾文学』という文芸誌の存在を知り、しかしそれはどこにあるのだろうか、テキスト自体はどうやって読めるだろう…と思いながらOPAC検索をしていたときにヒットしたのが、当時出版されたばかりの『日本統治期台湾 日本人作家作品集』と『日本統治期台湾 台湾人作家作品集』の二つの作品集だった。

これ以前に台湾に関する文学テキストを収録した書籍は、黒川創氏編集の『外地』の日本語文学選 南方・台湾』ぐらいだった。しかし、この本には西川満や周金波などの、当時毀誉褒貶が激しく研究論文に名前が挙がるが多かったテキストが収録されておらず、自分にとって物足りないものだった。それが、この作品集は、西川満集に二巻を割き、周金波の最重要テキストであった「志願兵」も入っていた。それぞれ六万円以上の価格で、修士課程の院生にはなかなか厳しい金額だったが、これを買わずに修士論文は書けない、思いついて購入し、レジで緊張しながら一万円札をばさばささせた時のことは、まだよく覚えている。それに前後して、『周金波日本語作品集』も手に入ったとき、私の研究テーマは「上京する青年」から「台湾の日本語文学」に、つながりはありながら（と自分では思っていた）大きく舵を切っていた。

これら作品集と研究書を通じて、台湾文学研究者の先生方のお名前を知り、他大学の講義中に押しかけたり、学会でお声がけするなどしてずうずうしくご指導を仰ぐ中で、台湾には日本統治期に出版された文芸誌をまとめて復刻した『新文学雑誌叢刊』という出版物があることを教えていただいた。そしてその話には、「そろそろ在庫が尽きる」という情報まで付随していて、私は大変焦った。その本が手に入れば、日本統治期の文学運動がかなり鮮明になる。しかしもうすぐその本は売り切れてしまう？どこに行っても買えないのだろうか？

そんな想いもあり、修士課程二年目の六月末から、私は台南市の成功大学の中国語語学研修コー

スに短期留学した。研究会やゼミで台湾のことを報告するようになってから、自分が何もわからずに台湾の日本語文学を扱っていることを痛感していた。それは今でも大して変わっていないが、そのときは「台湾にいけば変わるんじゃないだろうか」「そして資料も見つかって、論文も書けるようになるに違いない」と思ったのだった。そうして、私は、まだ学期中で授業もある時期に、指導教授や履修中の演習の先生に無理をお願いして、学校を休んで台南へ行ったのである。

中国語は「你好」と「謝謝」しか知らないレベルで台南へ行き、最初は学校へ通うだけで精一杯だったが、そのとき救いになったのは、成功大学の文学院図書室にあった日本語書籍と、『新文学雑誌叢刊』だった。成功大学図書館には、それがあったのだ。私は中国語の授業を終えると、ほぼ毎日、図書室へ行って、『新文学雑誌叢刊』を眺めていた。台湾に行ってまで日本語を読んでいる有様なので、中国語は上達せず、それは今でも後悔の種なのだが、初めて見る『新文学雑誌叢刊』と、その中の『台湾文芸』『台湾新文学』『文藝台湾』『台湾文学』『台湾文芸(1944年以降のもの)』は、私にとっては宝物を探し当てたようなものだった。しかもその図書室には『台南新報』『台湾日報』のマイクロフィルムまであり、中国語学習が行き詰まる一方で、私は自分が研究をしている、できている、という充実感を味わっていた。

その後、語学研修の途中にあった休暇期間に台北に出かけて、南天書局にたどり着き、とうとう『新文学雑誌叢刊』を手に入れることができた。そのとき、店長さんが「これはスペシャルですよ」と日本語で説明された言葉は、今でも忘れられない。船便で送られたそれを、私は帰国後にじりじりと待っていた。

二つの『作品集』と『周金波集』が、ちょうど台湾の日本語文学を扱おうと思った直前に出版されていたことに、私は勝手に運命を感じている。出版が遅かったら、ものぐさな私は台湾の日本語文学の調査を諦めていただろう。逆にもっと早かったら、他の誰かが先に研究を始めていて、ひねくれ者の私は取り組まなかったかもしれない。

その後、これらの作品集をまとめた先生方のご尽力で、さらに多くの〈資料〉が発見・復刻され、台湾の日本語文学研究の環境は信じられないほど整備されてきた。私はただその恩恵にあずかってきただけで、何の貢献もしておらず、恥ずかしい限りだが、せめて出来る限りこれらの〈資料〉を活用し、その重要性を示していくことができれば、と考えている。

追悼

三田裕次先生を偲ぶ

松田康博（東京大学）

台湾史研究家の三田裕次先生が、2014年11月になくなった。三田先生のあの強烈な個性がこの世から消えてしまった現実を前に、心の中が急に淋しくなった。一つの時代の終わりだな、と感じたものである。

なぜ私が三田裕次氏を「先生」と呼ぶかという、まさに台湾史に関する私の「師」であったからである。三田先生に最初にお会いしたのは、1992年から参加し始めた「東京現代台湾研究会」の定例研究会の場であった。同研究会は日本台湾学会の前身の一つである。関東の古株の研究者なら誰もが懐かしく思い出すはずの、数少ない勉強の場であった。

その定例研究会に、三田先生はほぼ毎回参加していた。先生は、一橋大学の学生だった1970年夏に台湾に立ち寄って以来、2年に1回台湾を訪問するようになった。当時、中国語の勉強をしながら、台湾の友人が読むための本を届けるのが目的だったという。そして、1981年から88年にかけて丸紅台北支店駐在員として約6年半台湾に滞在した時に大量に古書を収集し、台湾史の研究に没頭した。その間、一時中国文化大学で非常勤講師をされていた。

三田先生の台湾に関する知識は、群を抜いて豊富であり、研究会での発言は厳密だった。報告者に少しでもあやふやな発言があれば、すぐに三田先生の厳しい指摘が飛んだ。まだ院生だった私には正直ちょっと怖い存在だった。その後の懇親会では、タバコをプカプカふかしながら、大放談である。特に次々と繰り出される「台湾への愛情に満ちた毒舌」は、妙におかしかった。当時立法院

で繰り広げられた大立ち回りなど、三田先生にかかる「ありや『分類械闘』だな」という具合である。

その三田先生が、「松田君、うちで勉強会をやっている。来ないか？」と誘ってくださったのである。私はそれまで台湾のことを系統的に勉強したことがなかった。学部や大学院の授業は全て中国にかかわるもので、台湾関係はゼロであった。学部の時に台湾に4ヶ月半留学したにもかかわらず、台湾に関する知識が乏しかった私は、即お願いした。

この台湾史勉強会は、月に一回、土曜日午後小平市のご自宅で行われた。中国文化大学時代の教え子が日本に留学するようになり、彼らに台湾史を教えるため、1991年から始めたのだそうだ。先生曰く「今の台湾史の議論はあまりにも間違いが多すぎる。史実に基づき基礎を勉強しなきゃだめだ」、「わしがやらなきゃ誰がやる！」ということだった。ご自宅の地下が書庫になっていて、そこで車座になって勉強会が始まる。参加者はやはり台湾人留学生が多かった。私は1993年に参加した。

教科書は王育徳・宗像隆幸『新しい台湾—独立への歴史と未来図—』（弘文堂、1990年）であった。三田先生曰く、この本は「原住民に対する見方や事実認識がおかしい。それ以外は、おおむねまともである」というものであった。実際ページ毎に、史実と対照して、どこがどう間違っているかを、三田先生はきちんと指摘されていた。

当時は台湾に関する手軽な教科書は戴國煒『台湾—人間・歴史・心性』（岩波新書、1988年）くらいしかなかった。しかし三田先生は同書について「台湾と中国との関係、たとえば羅福星事件について中国革命との関係を過大に評価している」と手厳しかった。勉強会の途中で出版された、伊藤潔『台湾—四百年の歴史と展望』（中公新書、1993年）についても、「歴史研究の基礎ができていない」と、具体的に記述や写真などを挙げて的確に批判されていた。「なるほど、歴史家はこういうところを見るのか」と震え上がった記憶がある。

勉強会では、毎回教科書を一章ずつ読み、ポイント毎に三田先生の解説があった。平埔族、ケタ

ガラン、顔思齊、和唐内（鄭成功）、打狗、ダッチボンド、コイエット、蕃字洞、西仔、教冊、ファイエット（郭懷一）、甲螺（かしら）、ピンクワ（何斌）、三禁、福佬客、大租戸、草地、安平（アンピン）と安平（あんぺい）、ブンケツ（潘文杰）、螟蛉子、陳法、五分車、揚文会……。それまで聞いたことさえ無かった言葉が三田先生の口から台湾語（福佬語）混じりでスラスラと出てくる。何もわかってなかった。台湾史に関する自分の無知は、衝撃的なくらいひどかった。こうして、この勉強会を通じて、水を吸う砂のように、私の頭に台湾史の知識が入り込んだのである。

三田先生の解説には、「現物」がつきものだった。台湾を接収した軍部隊のパンフレットだったり、先住民と漢人の土地の契約書だったり、先住民語で書かれたマタイの福音書だったり、歴史的人物の写真だったり、辜顕栄の葬式のフィルムだったり、日本時代の流行歌の楽譜だったり……。『現物』の解説には、熱がこもっていた。私がそれまで接したことのない文化史の香りがぶんぶんした。

三田先生の凄さは、これらを全部自費で集めたことである。三田先生は無類の愛書家であった。驚くような本や資料が先生の下に集まっていた。「古本屋では必ず言い値で買いなさい。決して値切ってはいけない。言い値で買い続ければ、古本屋はあなたのためだけに本を集めてくれるようになるからね」というのが、三田先生の教えである。私はこの教えを今でも守り続けている。なぜなら、本当にその通りだからである。

勉強会が終わると食事を振る舞っていただいた。晴美夫人の絶品の手料理、無邪気なお子さんたち、換気扇の下でタバコを吸う三田先生……。今でもその情景をはっきりと覚えている。台湾人留学生との間の何気ない雑談の中で、三田先生は、自分の知識を再確認されていた。底なしの、恐ろしいまでの知識欲だったと思う。この私塾型の勉強会は、私の理想であり、将来の計画でもある。現役を引退して、研究室がなくなったら、三田先生のように、私も自宅で学生を集めて勉強会をやるのだ！

2009年に川島真さん、清水麗さん、楊永明さんと4人で『日台関係史——1945-2008』を上梓し

たときは、私が担当した1980年代の日台関係に関して、三田先生にインタビューをしたことがある。この録音は当時の台湾の雰囲気をも正確に伝える貴重な証言である。謹呈した時は「いい本だけど、政治外交史ばかりで、人的交流の記述が少ないね。たとえば王貞治について書いてもよかつたんじゃないかな」というコメントをいただいた。この20年あまり、著作を謹呈するたびに電話でコメントをしていただいたり、資料を送っていただいたり、メールをいただいたりしたが、次第に頻度が落ちていった。

三田先生は長年病気で苦しんでおられ、悪化・改善を繰り返していた。その中でも、先生は資料にこだわり、読書をやめず、事実間違いのある本の訂正を著者や出版社に求め続けた（いわゆる「台湾史もぐら叩き」）。まさに執念である。ただ、その几帳面なご性格もあり、一部の人から誤解を受けたり、敬遠されたりしたこともあったと聞いている。あの「毒舌」にびっくりした人も少なくないだろう。残念だがやむを得ないかもしれない。完璧な人などいないのだ。

三田先生が人生をかけて収集された本や資料は納本・寄贈され、主に呉三連台湾史料基金会三田文庫、国立政治大学台湾史研究所三田文庫、広島大学三田図書等として公開されている（ご本人は「里子に出す」と表現されていた）。またご自宅の台湾史勉強会で三田先生の警咳に接した後進は少なくない。希有な市井の台湾史研究家として、三田先生のお名前は永遠に残るに違いない。

三田裕次先生、ご自宅での台湾史勉強会、本当に楽しかったです。これからも天国から台湾を見守っててください。

日本台湾学会活動報告

定例研究会

歴史・政治・経済部会

担当理事：小笠原欣幸（東京外国語大学）

第91回日本台湾学会定例研究会活動内容

共催：早稲田大学台湾研究所ワークショップ

日時：2014年6月20日（金）18:20～20:30

場所：早稲田大学1号館 現代政治経済研究所会議室

報告者：松永正義（一橋大学名誉教授）

コメンテーター：春山明哲（早稲田大学）

題目：シリーズ台湾史研究の回顧と展望(6)ー台湾文学史

参加人数：21名

活動報告：

本報告では、日本統治期から現代までの台湾文学研究の変遷を台湾のみならず、中国、香港、日本を対象地域として跡づけ、研究者の政治的立場、方法の個別特殊性、中台関係という現実政治の緊張関係との関連性に焦点を当てつつ論じている。日本では、1960年代までは台湾文学研究は蓄積が乏しく、また政治的背景から研究対象も「台湾」ではなく「中華民国」であった。1970年代からは、アジアへの侵略・植民地問題の提起と絡んで戴國輝らの在日台湾人研究者の視点が台湾文学研究を活発化させるものとなった。台湾では、1960年代は文学研究において日本時代と戦後の乖離があり、台湾省文献委員会による「文学史」が主たる業績であったが、70年代から中国ナショナリズムにおける「抵抗の伝統」に依拠した形で日本時代の再発見が陳少廷らによって展開されていった。80年代になると、台湾においてナショナリズムの発達に沿って「台湾文学」という概念が確立され、陳少廷、葉石濤らによって文学史研究も芽生えた。

中国でも台湾文学研究が始まった。台湾民主化を経た90年代以降、日本では「台湾研究」という領域の確立とともに文学研究の視点や方法も多彩なものとなり、原住民文学などにも光が当てられるようになった。台湾でもアカデミックな研究として台湾文学研究が成長を見せている。（記録者：遠藤正敬）

第92回日本台湾学会定例研究会活動内容

共催：早稲田大学台湾研究所ワークショップ

日時：2013年7月4日（金）18:20～20:30

場所：早稲田大学1号館 現代政治経済研究所会議室

報告者：陳延媛（中央研究院台湾史研究所副研究員）

題目：シリーズ台湾史研究の回顧と展望(7)ー「東洋史」と「国史」のはざままで

コメンテーター：春山明哲（早稲田大学）

参加人数：19名

活動報告：

中央研究院の台湾史研究所にて「台湾史研究の回顧と展望」の一環として、戦後から2010年までの韓国における台湾史研究の整理を行ってきた。台湾の韓国研究者の韓国語能力の欠如という前提を考慮すると、自らが個別論著に対する記述や評論を下さないことで公正さ・研究倫理を保ち、学術史・文学史として充実かつ正確な論文目録を提供することで学界への貢献とすることを目指した。具体的には韓国歴史学界における分業と領域分けについて学会を中心に分析した。

韓国史学界における国家主義と国史という観点＝韓国歴史学界に依然として健在するナショナリズムを中心とする立場においては、従来東アジアが実質的に中国と日本との関係のみで置き換えられる「東洋」として、国史としての韓国の歴史的地位が探索されていた状況から、近年は次第に研究者個人の東アジア論の方向へ広がりを見せつつある学界動向と関連して、90年代以降の台湾史ブームの高まりの中で台湾留学を経験した文明基などに代表される現代韓国における台湾史研究も、台湾史をその他の東アジア地域史と共に歴史共同体としての「東亜史」の中に位置づけ、東アジア

世界を従来の中国・韓国・日本などの国家に寄つてのみ支えられてきた国史中心の視点だけでなく、同時に香港、沖縄、台湾など国境からはみ出た周辺地域という存在からの批判的視点から補完され修正されるべきといった新たなアジア論が展開されている。国史が往々にして国家間の歴史認識の対立問題として扱われる中、ジェンダーや人権などそうした構図から抜け落ちてしまうことを忘れてはならない。ちなみに韓国における台湾史ジャーナル論文が毎年30本ほどある一方で、韓国における台湾史専門研究者がいないため、韓国で有名無実な「台湾(史)研究所」の乱立という問題も存在するが、個人的には、韓国において台湾史という研究分野が必ず必要であるという規範的立場にはないものの、これからどのように展開していくのか、第三者として楽しんでいる。(記録者：平井新)

第93回日本台湾学会定例研究会活動内容

共催：東洋文化研究所、科研基盤B(代表：松田康博)

日時：2014年7月31日(木)16:00~18:00

会場：東京大学東洋文化研究所303大会議室

司会兼コメンテーター：松田康博(東京大学)

報告：周志懐(中国社会科学院台湾研究所所長)

題目：習近平時代の兩岸関係

コメンテーター：張華(中国社会科学院台湾研究所研究員)

参加人数：23名

活動報告

習近平時代を迎えた中国において、対台湾政策はどのように変化するのか。また、今後の中台関係(兩岸関係)はいかなる展開を見せるのか。今回のセミナーでは、中国社会科学院台湾研究所より周志懐所長を招聘し、研究者個人としての立場から同問題についての報告を依頼した。周氏は、標題を「大陸対台政策与未来兩年兩岸關係發展」

〔大陸の対台湾政策と今後2年間の兩岸関係の発展〕として中国語で報告を行った。

周氏はまず、兩岸関係の新局面を理解するための前提として、毛沢東時代から今日に至る中国の対台湾政策の連続性に注目することの重要性を説き、

その要点を整理した。すなわち、鄧小平が「一国二制度」を提起し台湾の「平和統一」への道を開くと、江沢民時代には香港及びマカオの返還でその実践がなされ、胡錦濤時代には台湾の平和統一に向けた具体的な施策が次々と展開された。この流れを継承する習近平時代の政策の要点は、「中国の夢をともに叶える〔共円中国夢〕」ことを台湾の同胞に向けて訴える点や、「兩岸の政治分岐を代々伝承するわけにはいかない」とする方針などに求められる。ただし、周氏は、台湾統一の試みは性急に進められるのではなく、「小さな火でゆっくりと煮詰める〔小火慢炖〕」ことになると見る。共産党と国民党の間の主要な分岐は、生活方式およびイデオロギーをめぐる問題にあるが、これは調整可能である。ただし、共産党と民進党の間の主要な違いは、国家の主権と領土の保全をめぐる問題にあり、これは調整不能である。しかし、周氏は「台湾独立」はもはや台湾の主流の思潮ではなく、将来的な台湾との平和統一を概ね楽観視しているという。

コメンテーターの張華氏からは、周氏の講演に対する補足として、兩岸の民間交流も活発化していることにより、双方の民衆が互いに対して正確なイメージを持ち始めているなどの指摘がなされた。フロアとの質疑応答では、香港情勢の台湾問題への影響について、周氏は台湾と香港は根本的に問題の性質が異なると指摘した。これと関連して、台湾との統一形式は必ずしも「一国二制度」である必要はなく、兩岸双方が受容できるものであれば、新たな案が出て来る可能性があるとの見解も示された。習近平と馬英九との会談については、実現は難しいとする一方、「兩岸の指導者の会談」は可能であると指摘された。また、2014年3月の「太陽花運動」の兩岸関係への影響については、張華氏より、大勢に影響はないだろうとの見方が示された。(記録者：松田康博)

第94回日本台湾学会定例研究会活動内容

共催：早稲田大学台湾研究所ワークショップ

日時：2014年10月10日(金)18:20~20:30

場所：早稲田大学1号館 現代政治経済研究所会議室

司会者：春山明哲（早稲田大学）
報告者：飯島涉（青山学院大学文学部教授）
題目：シリーズ台湾史研究の回顧と展望（8）－植
民地医学・帝国医療

参加人数：17名

活動報告：

報告者は、植民地医学・帝国医療について、これまでの経緯と現状を紹介するとともに、今後の課題についても報告した。報告の内容は、主に以下の四点についてである。①「植民地医学」と「帝国医療」という研究分野の起源とその発展、②台湾における研究史の流れ、研究アプローチの変遷、代表的な論文や最新の研究動向、③日本、韓国、中国、香港、東南アジアにおける医学・医療史の概観とそれぞれの特徴、④東アジアのモデル化、英領インドと東アジア諸国事例との比較、資料保存の現状と課題である。日本と台湾におけるこの分野に関する研究を比較してみると、台湾における医学・医療史の研究は、積極的に行われており、国内外の大学・研究機関等との連携が進んでいる。他方、日本において、この分野はほとんど未開拓であり、今後いっそうの検討が必要である。（記録者：魏逸瑩）

第95回日本台湾学会定例研究会活動内容

共催：早稲田大学台湾研究所ワークショップ
日時：2014年11月21日（金）18:20～20:30
場所：早稲田大学1号館 現代政治経済研究所会議
室

司会：若林正文（早稲田大学）

報告者：三澤真美恵（日本大学教授）

題目：シリーズ台湾社会・文化研究の最前線（1）
－1950年代前半台湾の映画館における「国歌
斉唱」プログラムの確立

参加人数：20名

活動報告：

本報告は、1950年代前半、国民党政権下の台湾における映画統制の一環として表れた、映画館での国歌斉唱プログラムの立案および実施の過程について検討するものである。戦後台湾映画史をめぐる先行研究は1990年代以降、広がりを見せているが、国民党政権の文化政策のなかで映画をと

らえたものは乏しく、映画館における国歌斉唱の問題の研究は存在しなかった。そこで報告者は、台湾の映画館における国歌斉唱という問題を「国民統合のための映画統制」という分析枠組によって、国民党中央改造委員会が国民宣伝工作に用いた内部資料『宣伝週報』をはじめ、多くの档案資料やメディア資料を使用して検証している。国民党の台湾撤退から程ない1950年代前半という時期に、「中華民国国民」統合のナショナル・シンボルとしての孫文と蒋介石や青天白日旗が登場する国歌フィルムの上映や、「三民主義」を歌詞に盛り込んだ国歌の起立斉唱が、台湾の「国民国家」建設を志向した「儀式」として各地で積極的に行われたことが、報告者によって明らかにされた。（記録者：遠藤正敬）

第96回日本台湾学会定例研究会活動内容

共催：早稲田大学台湾研究所ワークショップ
日時：2014年12月12日（金）18:20～20:20
場所：早稲田大学1号館 現代政治経済研究所会議
室

司会者：若林正文（早稲田大学）

報告者：陳培豊（中央研究院台湾史研究所研究員）

題目：シリーズ台湾社会・文化研究の最前線（2）
－「小節」から見た植民地台湾の残照～台湾
歌謡曲に現れた政治、経済、エスニシティの
葛藤～

参加人数：26名

活動報告：

台湾は典型的な多言語、多民族的な社会であるため、エスニシティの相違により特色の異なる歌謡曲を有している。戦前、戦後を通して台湾語（閩南語）歌曲と国語（北京語、日本語）歌謡曲の相違点を見てみると、それは歌詞（言語）のほか小節にある。小節は前者にとって、重要な要素であるのに対して、後者は小節を古臭くて低俗なものとなししている。

歌謡曲とは世相を反映する鏡であるため、本報告は小節を通して台湾社会文化史を論述し、台湾の庶民の精神生活を探求する試みがある。本報告では、①小節と台、日歌謡曲の戦前、②戦後、台語歌謡に染み付いた小節、③小節に対する本省人、

外省人の捉え方、④新世代による音楽の所有権の再定義、⑤「われわれの音楽」の再定義、によって、戦前・戦後台湾歌謡曲の変容を分析した。以上の内容を踏まえ、小節に対する捉え方の相違は、国語、台語歌曲間に境界線をもたらし、台湾社会の中にある異なるエスニシティの感情構造の葛藤に反映された、と本報告は指摘した。(記録者：魏逸瑩)

第 97 回日本台湾学会定例研究会活動内容

共催：早稲田大学台湾研究所ワークショップ、科研基盤 B (代表：松田康博)

日時：2015 年 1 月 23 日 (金) 18:00~20:00

場所：早稲田大学 22 号館 615 教室

司会：若林正文 (早稲田大学)

報告者：小笠原欣幸 (東京外国語大学)

題目：2014 年台湾統一地方選挙の分析

コメンテーター：松田康博 (東京大学)

参加人数：47 名

活動報告：

今回の定例研究会では、長年台湾の選挙観察・分析に取り組んできた小笠原欣幸氏により、「2014 年台湾統一地方選挙の分析」と題する報告が行われた。2014 年 11 月 29 日に投開票が行われた台湾の統一地方選挙、いわゆる「九合一」選挙は、国民党の大敗に終わった。小笠原報告はその結果について、①台北市長選挙が全体の情勢に与えた影響、②中国要因、③2016 年の総統選挙への影響、という 3 つの観点から考察したものである。概要は以下のとおり。

まず大局として、今回国民党が大敗したのは明らかだが、得票率の変化を見れば民進党が圧勝した選挙と捉えるべきであることが指摘された。無党籍候補の得票を便宜的に緑藍両陣営に割り振ると、今回の選挙で示された勢力比は 55:45 と見なせる。国民党からすれば、これだけ差をつけられた状態から 2016 年の総統選挙を戦わなければならず、非常に厳しいということになる。これはかつて民進党が感じていた厳しさであり、民進党と国民党の勢力が逆転したとも言える。

また、縣市議会議員選挙でも、初めて民進党が国民党を得票率で上回った。両陣営は都市部では

もはや互角であり、これは台湾の地方政治の常識を覆すような事態である。民進党は台中、雲林、桃園という総統選に向けた戦略的拠点でも勝利したので、ただ勝っただけでなく良い勝ち方をしたと言える。

このうち台中は、現職胡志強候補が再選された場合の通算 17 年という在任期間が台湾人の感覚では長すぎたことに加え、林佳龍候補の魅力が勝利を導いた。一方雲林では、国民党の張麗善候補が個人の魅力では圧倒していたにもかかわらず、李進勇候補に敗れた。雲林で注目すべきは、地方派閥の張派の切り札であった張麗善候補が敗れたのみならず、郷鎮長選挙では張派の候補が国民党の看板を掲げず、多くが無党籍で当選している点である。今後、地方派閥の大型選挙への影響が薄らぐことが予見される。加えて今回の選挙では、鴻海科技集団の郭台銘会長が応援演説に入った 5 つの県市長選すべてで国民党が敗北を喫しており、その最初の場所に選ばれた雲林は後述の「中国要因」の一端も示していたと言える。

今回の選挙の背景として、台湾社会における馬政権への不満の高さは大前提である。しかし、国民党に対しては予想を凌駕するすさまじい逆風が吹いた。その原因は、「台北効果」と「中国要因」に集約されると考えられる。

もともと台湾の選挙において台北の影響力は突出している。しかし今回は、国民党内で高い人気を誇る朱立倫が新北市長選で抑制的な選挙戦を展開したため、台北市長選の連勝文候補が国民党のネガティブなイメージを代表してしまった。「連勝文=権貴」批判は以前からあったが、「ひまわり学生運動」の効果で、「連勝文=両岸権貴」と見なされるようになり、そのイメージは各種メディアで拡散した。帰趨が決まったのは 9 月で、連勝文はテレビコマーシャル戦術の失敗で悪印象を決定づける一方、無党籍で出馬した対立候補の柯文哲は藍緑対立を超えようと呼びかけ、有権者とツーショット写真を取るなど、距離の近い戦術で支持を広げた。

ここに食用油問題も加わった。台湾では毎年のように食の安全問題が起こるが、今回は中国との関係で成長した企業である「頂新グループ」の存

在が取りざたされたことから、馬英九政権の対応への不信感は一層増大した。さらにダメ押しとして、連勝文の父である連戦が柯文哲を「日本植民地の官二代」と呼ぶ暴言を発すると、柯文哲は「父は小学校教師です」と軽く受け答え、市民からの共感を確実なものとした。

2016年の総統選挙の展望としては、まず立法委員選挙で民進党は国民党に過半数割れを起こさせる戦略を取るようになる。どのような結果となるかは、今回当選した県市長のパフォーマンスが影響してくる。若者が今回の選挙に手ごたえを感じていることも大きい。中国に介入の手段はあるのかという問題については、すでに昨年9月に習近平は「一国二制度カード」を出しているため、もはや「国民党だから中国と交流できる」と印象付けることができない。

総じて、今回の選挙は「ポスト馬英九時代」の訪れを告げるものであったと同時に、「中国要因に対する拒否反応」および「台湾の民主政治の活力」を感じさせるものであった。

以上の小笠原報告に対し、コメンテーターの松田康博氏からは主に2016年の総統選挙への展望について以下の指摘がなされた。まず、2016年には「国民党の敗北を最大化した連勝文」が出てこないことから、国民党と民進党との差は縮まると考えられる。また、中国との関係についても、たとえば「民進党が勝つと大陸からの観光客が減る」という噂が流れた場合など、情勢が変わる可能性がある。2000年と2016年では两岸の力関係が全く違うことにも注意が必要である。大陸側は「共産党に主導権、国民党は主動権」という言葉を使っている。国民党のお手並み拝見、ということである。民進党としては、対中政策でどれだけ柔軟性を持つかが重要になってくる。

フロアとの質疑応答では、香港雨傘革命の影響、米台関係への影響、2016年総統選の争点などについて議論が交わされた。香港との関係では、「ひまわり学生運動」が雨傘革命に与えた影響の方が大きく、台湾が香港から受けた影響は相対的に小さいのではないかと指摘があった。アメリカとの関係については、総統選で民進党候補となることが確実視される蔡英文は、アメリカからトラブル

メーカーになりうると警戒されており、どれだけ変わるかがポイントになるとの指摘がなされた。2016年選挙の争点については、これまで大きな争点であった統独問題は後退し、もはや藍陣営も緑陣営も大陸との安定化を考えざるを得ない中、「分配問題」が争点として大きく浮上する可能性はあるかという問題について議論がなされた。

時宜にかなったテーマに、最も適任な報告者を得て、会場には40人を超える来聴者が集まった。司会の若林氏も「時間を感じさせない」と賛辞を送った密度の濃い報告に、会場も知的興奮で大いに盛り上がった2時間であった。(記録者：家永真幸)

第98回日本台湾学会定例研究会活動内容

共催：東京大学東洋学研究所情報センター

日時：2015年2月17日(火) 18:30～20:00

場所：東京大学東洋文化研究所303 大会議室

司会：松田康博(東京大学)

報告者：岩谷将(防衛省防衛研究所戦史研究センター主任研究官)

清水麗(東京大学東洋文化研究所特任研究員)

題目：「現代台湾文庫」—その資料的価値・可能性

—

報告1：岩谷将「書籍を中心として」

報告2：清水麗「檔案資料を中心として」

参加人数：20名

活動報告：

東洋文化研究所に所蔵されている「現代台湾文庫」について、まず岩谷報告では、すでに図書館で閲覧が可能となっている国民党、国防部、法務部調査局からの流出史料の一部や一般古書について紹介がなされた。1950年代から70年代を中心とするこれら資料は、1960年代のものが最も多く、国防部、国家安全局、法務部調査局などにより作製されたものが多くあり、スターンフォード大学フーパー研究所(現在はSAL1&2)のコレクションにも類似の書籍が所蔵されている。

今後の研究において、大陸反攻、共産党研究、情報・防諜、政治工作などの領域において活用されていくと予想されるが、特に暗号解読にたずさ

わった魏大銘の『無開戦戦争』や、国家安全局の『我国現代情報工作簡史』、遷台直後に在台ソ連エージェントであった汪声和事件、朝鮮戦争などに関する資料は、興味深いものであることが指摘された。一方それらは断片的な資料であり、フーバー研究所をはじめとして台湾の法務部・国史館・中央研究・国家档案馆などで閲覧しうる資料とあわせて活用されるべきものであるが、中国・台湾の古い書籍については時間がたつほど手に入りにくくなる現状からみれば、今後さらに価値があがるものと考えられる。

一方、檔案資料に関する清水報告で、400件を超える資料が整理され、2015年4月以降順次閲覧可能となるとの状況説明がなされた。それらは1950-70年代を中心に、黄少谷が関わった国防、外交、宣伝指導などの文書、伝単、行政院や中国国民党、宣伝指導小組、宣伝指導委員会、国家安全会議等の会議資料や文書による意見交換、メモが含まれ、多くは機密扱いとされるものである。また、式典などに関わる資料やパンフレットのほか、国連での状況を伝える書簡なども含まれている。

1950年代の宣伝指導委員会の資料では、黄少谷が主任として丁寧に意見を集約し調整機能を果たした面が垣間見られるほか、香港の刊行物の内容について経費を握っていることを背景に強い指導をしていた実態などもわかる。政策策定過程や、黄少谷を中心とした分析による政治過程の解明など、新たな研究を生み出す可能性が見出しうる。また、国防、情報工作に関しても、マニュアルや幹部講習会での資料、伝単などの実物を見ることにより、時代感覚をつかむこともできる。国防、外交、宣伝、国内政治、大陸政策等さまざまな領域の研究者が、今後どのような情報をこれら断片的な資料のなかから見出していくことになるのであろうか。

2名による報告の後、参加者が実際に資料実物を手にとりながら、資料の貴重性とセンシティブな内容について検討・確認し、今後の研究での活用の可能性などについて意見交換を行った。(記録者：清水麗)

定例研究会 関西西部会研究大会

担当理事：澤井律之（京都光華女子大学）

日本台湾学会第12回関西西部会研究大会は、台湾史研究会と共催で昨年12月20日、神戸学院大学で開催された。参加者は26名、プログラムは以下のとおり。

- ①「鉄道の「帝国」化 鉄道滞貨問題と「台中連絡問題」を中心に」松葉隼（一橋大学・院）
評論：やまだあつし（名古屋市立大学）
- ②「帝国資源開発と植民地—台湾馬政計画を中心に—」岡崎滋樹（立命館大学・院）
評論：やまだあつし（名古屋市立大学）
- ③「「芝山巖事件」の慰霊と定型化—「芝山巖祭」の開催に着目して—」山本和行（天理大学）
評論：Jenine Heaton（関西大学非常勤）
- ④シンポジウム「台湾と観光」15:00~17:00
問題提起：やまだあつし
パネリスト：曾山毅（玉川大学：観光史研究の立場から）台湾の観光史
上水流久彦（広島県立大学：文化人類学・地域研究の立場から）台湾人の八重山観光
川上桃子（アジア経済研究所：経済学の立場）現代中国人観光客の台湾観光
横井均（三普旅行社 営業部長：旅行業の立場から）現代日本人の台湾観光
司会：五十嵐真子（神戸学院大学）

①の発表は鉄道研究、②は馬政研究で、コメンテータからは資料への目配り等でやや厳しい指摘もなされたが、新奇なテーマを扱った意欲的なものであった。③は「芝山巖事件」が教育制度に取り込まれていくプロセスを先行研究をふまえながら新たな見解の構築を試みる野心的なものであった。

④のシンポジウムは、学会運営者のアイデアであるが、パネリストは東京と広島から来ていただいた。観光業界の方にもご出席いただいた。前半でそれぞれのパネリストが基調報告を行い、後半でフロアからの質問と意見に答える形式で進めら

れた。植民地の修学旅行、沖縄と台湾、ポリティカル・エコノミー等のキーワードのもとで台湾と観光が様々な視点から論じられた。近年、日本の台湾への修学旅行が増えていることが話題になると、フロアーには実際に引率した高校教員の方もおられ、いったい台湾で何を観光するのかについて会場全体で議論になり、盛り上がりを見せた。なお、本シンポジウムは、台湾史研究会の会誌に公表を予定している。

定例研究会
台北

担当理事：富田哲（台湾・淡江大学）

第 66 回台北定例研究会

日時：2014 年 12 月 13 日(土)15:00
場所：台北教育大学行政大楼 A605 室
報告者：前原志保(台湾大学博士)
テーマ：「ナショナリズム諸理論からの台湾ナショナリズム再考」
使用言語：日本語

第 67 回台北定例研究会

日時：2014 年 12 月 20 日(土)15:00
場所：台北教育大学行政大楼 A605 室
報告者：高野華恵(交流協会台北事務所専門調査員／日本台湾学会会員)
コメンテーター：洪耀南(未来事件交易所執行長)
テーマ：「台湾九合一選挙の検証」
使用言語：北京語

第 68 回台北定例研究会

日時：2015 年 1 月 24 日(土)15:00
場所：台北教育大学行政大楼 A605 室
報告者：林琪禎(和春技術学院応用外語系／文藻外語大学日本語文系(非常勤))
コメンテーター：藤井康子(清華大学外国語文学系／天主教輔仁大学日本語文学系)
テーマ：「日本統治期国民学校制度の問題性」
使用言語：北京語、日本語

学会運営関連報告

担当理事：垂水千恵（横浜国立大学）

第 8 期理事会

第 5 回常任理事会議事録（抄）

日時：2014 年 12 月 13 日（土）14：00～17：30
場所：日本大学文理学部本館一階会議室 C
出席：北波道子、駒込武、佐藤幸人、垂水千恵、星名宏修、松金公正、松田康博、三澤真美恵、山口守（以上、常任理事）、沼崎一郎（大会実行委員長）

欠席：川島真
主宰：山口守
書記：松岡格

報告

1. 各業務担当

(1) 佐藤編集委員長

- ・ 審査対象論文 14 本のうち、採用予定は 4 本、再審査は 6 本、不採用は 4 本。
- ・ 審査用紙の形式を見直す方向で次期編集委員会に申し送りしたい。

(2) 松田広報担当理事

- ・ ホームページ—順調に運営中
- ・ メールサービス—順調に運営中。401 名が登録されている（422 件）。会員数の 93% をカバーしている。
- ・ ニュースレター—27 号に関して編集作業はほぼ終わっている。28 号に関しては原稿依頼を始めているところである。

(3) 松金文献目録担当理事

- ・ 2014 年 6 月末現在 11,526 件であったが、同 11 月末で 11,954 件となったので、428 件の増加が見られた。2014 年 3 月末と比較すると 1,156 件の増加であった。

(4) 川島国際交流担当理事（山口理事長代理報告）

- ・ JCASA (地域研究学会連絡協議会) に日本台湾学会の加盟が認められた。
- (5) 北波関西部会担当理事
 - ・ 12月20日(土)に神戸学院大学有瀬キャンパスで第12回関西部会研究大会が開催予定。シンポジウムのテーマは「台湾と観光」。

議題

1. 第17回学術大会について

(1) 分科会企画・自由論題報告について(星名理事)

- ・ 企画審査状況

分科会企画4企画(そのうち常任理事会企画が一つ、二セッション企画が一つ)、自由論題13企画の申請があった。開催校企画を含めると分科会企画が7企画、自由論題13企画となった。

(2) 会場校の準備状況について(沼崎実行委員長)

- ・ シンポジウム—開催校企画のうちの一つとして、仙台市との共催によりシンポジウム「東日本大震災と台日交流—台南市と仙台市の場合—」を開催する。
- ・ タイムテーブル—土曜日一日(2015年5月23日)開催ということで、タイムスケジュールが示された。参加者に事前に連絡することを前提に、昼食は各自で適宜とる(昼休みは作らない)ことにする。

午前9時受付開始

09時30分~11時20分 分科会(第一部)

11時30分~13時20分 分科会(第二部)

13時30分~15時20分 分科会(第三部)

15時30分~18時00分 シンポジウム

18時10分~18時40分 会員総会

18時50分~20時50分 懇親会

- ・ 実行委員会の構成

メンバーと役割分担が決定した。

実行委員長:沼崎一郎(東北大学)、副委員長:山崎直也(国際教養大学/名簿管理・電子化・郵送)、松金公正(宇都宮大学/理事会との連携)、その他委員:原英子(盛岡短期大学/受付・会計)、菅野敦志(名

桜大学/プログラム)、酒井亨(金沢学院大学/会場・懇親会)、川上桃子(アジア経済研究所/書店)、上水流久彦(県立広島大学/地方大学アドバイザー)

- ・ 大会案内など郵送書類の電子化について決定した。

(3) 大会予算案について(三澤理事)

- ・ 大会予算案が示された。

2. 理事改選について(山本和行委員長、垂水理事代理)

選管委員会:山本和行委員長、池上寛委員、林初梅委員。投票用紙は1月15日(木)発送の予定、投票締切が2月9日(月)必着。開票作業は2月13日(金)の予定。

3. 学会賞選考について(駒込理事)

政治経済部門については北波道子(関西大学)、歴史社会部門については洪郁如(一橋大学)、文化文学言語部門については陳培豊(中央研究院)が審査を行う。恒例により、理事全員に推薦・意見をつる。

4. 身分変更に伴う会費額について(三澤理事)

年度途中で身分が変わった場合、年度はじめ(4月1日)時点での身分で請求することに決定した。

5. 会員の入退会について(垂水理事)

李佩蓉、米多、許珩、源一秀、高橋潤子の各氏から入会希望、于曉飛氏から退会希望があり、承認された。

6. 次回の常任理事会の日程について(垂水理事)

次回常任理事会は2015年3月7日(土)の14時に開催予定。

以上

----- 編集後記 -----

* 新年度が始まりました。札幌では、ようやく露の臺が顔を出し、木々の芽も膨らみはじめました。ニュースレター第28号をお届けします。

* 昨年11月の台湾統一地方選挙に関わる観察記を、前号の速報に引き続き、特集としてお届けします。本年1月には、東京および台北の定例研究会においても、それぞれ関連する報告が行われています。各担当理事がとりまとめられた「学会活動報告」もあわせてご覧ください。

* もうひとつの特集「台湾研究の素」では、自らの研究遍歴における〈資料〉との出逢いを軸として、ご自身の研究の“おもしろさ”についてご執筆いただきました。個々の具体的な〈素材〉が、研究を進めていく導きの糸となり、また、学問領

域を超えて議論を切り結んでいくような刺激剤ともなり得ることを、改めて実感します。

* 台湾の歴史、文化、人々に深い関心と限りない情熱を注ぎ続けた三田裕次氏が、2014年11月に逝去されました。同氏は、本学会創立当初からの会員でもありました。寄せられた追悼文を掲載するとともに、心より哀悼の意を表します。

* 会員の皆様には、台湾研究に関わるシンポジウム・研究会・展示の参加記や、学术交流の動向等の積極的なご投稿をお待ちしております。

* 来る5月23日(土)には、第17回学術大会が東北大学にて開催されます。仙台にてお会いしましょう。(北村嘉恵)

日本台湾学会ニュースレター 第28号

発行：日本台湾学会(代表 山口守)

発行年月：2015年4月

■日本台湾学会事務局

〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1

東京大学東洋文化研究所 松田康博研究室気付

E-mail: nihontaiwangakkai@gmail.com

■ニュースレター発行事務局

〒060-0811 札幌市北区北11条西7丁目

北海道大学教育学部 北村嘉恵研究室気付

E-mail: jats-newsletter@eis.hokudai.ac.jp